

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## A Reference Manual for Studying the Qiangic Languages of : the Western Sichuan Ethnic Corridor

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 巧 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001910">https://doi.org/10.15021/00001910</a>

## 西南中国〈川西民族走廊〉地域の言語分布 レファランス資料集

池田 巧

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| 1 概要                 | 5.4 地域語(地脚話)           |
| 2 〈川西民族走廊〉諸語の系譜      | 6 チベット語方言の資料           |
| 3 〈川西民族走廊〉地域の言語地図    | 7 〈川西民族走廊〉の諸言語に関する主要文献 |
| 4 《中国少数民族語言使用情況》のデータ | 8 中国の藏緬語の系譜分類          |
| 5 《甘孜藏族自治州民族誌》の記載    | 9 各言語資料の凡例             |
| 5.1 カム(康)方言          | 10 消滅の危機について           |
| 5.2 アムド(安多)方言        |                        |
| 5.3 ギャロン(嘉戎)語        |                        |

### 1 概要

西南中国の雲南省北部から四川省西部を通り青藏高原へと連なる複雑な地形の山岳地帯は〈川西民族走廊〉と呼ばれ、農耕を主とする漢文化圏と牧畜を主とするチベット文化圏との境界を形成するとともに、歴史的にさまざまな民族の移動ルートとなってきた。この地域には現在も少なからぬチベット系の少数言語が話されており、その言語構造の記述分析は、チベット・ビルマ諸語の類型構造の歴史的発展の研究にさまざまな啓発をもたらすものと期待されているが、いずれも数千人規模の少数言語であり、中国の経済発展にともなう急激な社会状況の変化のなかで、消滅の危機に瀕する可能性が高まりつつある。地理的社会的条件から現地調査を行なうことのできる研究者の数も限られているため、話し手の人口や地理分布といった基本情報が十分に蓄積されておらず、これまでに公表された情報は断片的に散在していることもあって、全体を俯瞰して総合的に把握したうえで、関連ある個別の言語についての情報を相互参照するのは容易ではない。

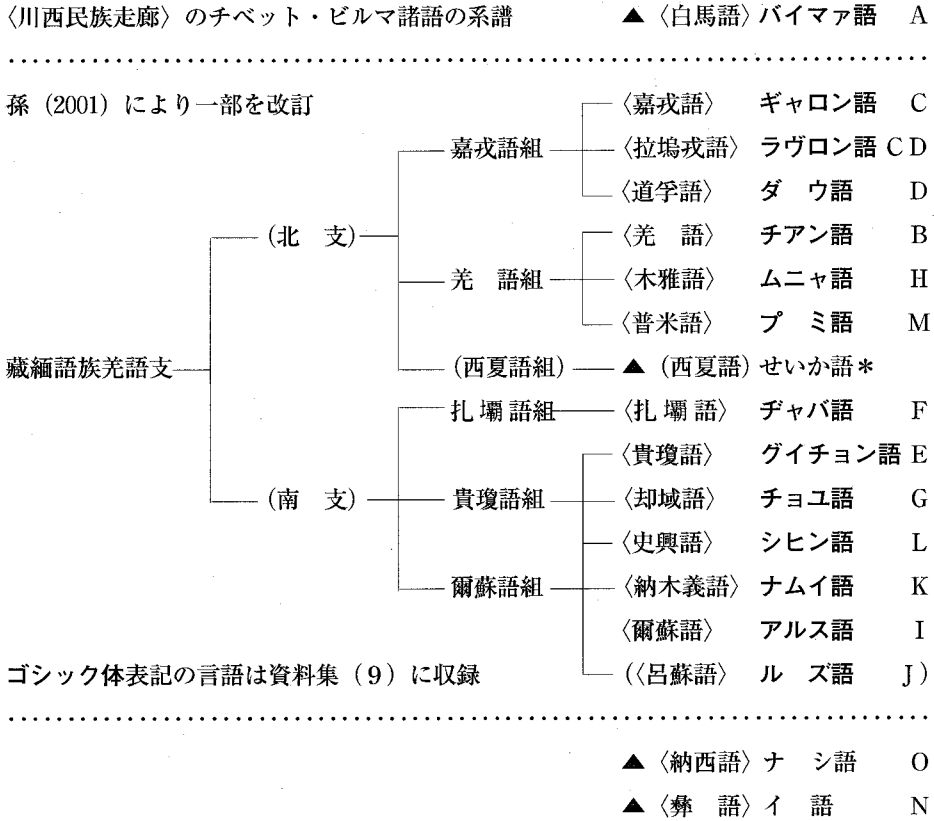
本稿は〈川西民族走廊〉地域の言語分布図を作成するための基礎作業として作成した資料集である。〈川西民族走廊〉には、どのような言語が分布しており、研究者が現在までのところどのように分類しているか、また個別の言語についてその詳細を知るにはどのような文献に当たればよいのかを簡便に参照できることを目的として、同地域の言語の社会的状況に関する概述の抄訳と、言語の構造を知るための主な参照文献目録とを有機的に関連づけて構成したものである。付載の分布図は本資料集に集成した現在まで

に入手可能な情報に基づき作成したが、今後資料が増加すれば、改訂を加えていく必要があるだろう。各資料には必要に応じてその資料を利用する上で注意すべき問題点について簡単な解説を付しておいた。なお抄訳を掲載した文献の記述を引用する際には、抄訳からではなく、必ず示された出典にあたったうえで、そこから引用して頂きたい。

本資料集では消滅の危機に瀕する可能性の観点から〈川西民族走廊〉に分布する諸言語のうち、地域共通語としての漢語方言、チベット語方言を除外したうえで、話し手の推計人口が10万人未満の小言語を主な対象として取り上げている。またチベット・ビルマ諸語の研究において重要な位置を占めてきたナシ〈納西〉語とイ〈彝〉語については、〈川西民族走廊〉の外側に向かって広く分布しており、研究の蓄積も多いので別の機会に譲ることとし、本資料集には体系的に収録していない。中国語の書名/地名/言語名/用語などは訳さずに日本語の正字に置き換えたうえで〈 〉で括って表示している。

## 2 〈川西民族走廊〉諸語の系譜

〈川西民族走廊〉に分布する諸言語の大部分は、その類型構造と同源語の共有率にもとづき〈羌語支〉Qiangicとしてグループ化されている。全体を俯瞰するために、ここでは孫(2001)の〈羌語支〉に属する13言語についての系譜分類図に若干の改訂を施したものを本資料集の目録を兼ねて掲げておく。主な変更点はつぎのとおり。まず孫(2001)の系譜図は南が上に北が下に配列されていて、言語分布図との対照に不便なので、南北の地理分布にあわせた配列に改めたが、言語間の親疎関係とグループ化は孫教授の考えを尊重してそのままにしてある。一部の言語名および漢字表記を改め、日本語のカタカナを添えた。言語名についての詳細は各言語の解説を参照されたい。孫教授はアルス〈爾蘇〉語の西部方言とするが、黄布凡教授は独立の言語と考えるルズ〈呂蘇〉語を追加した。また孫教授の原図で位置付けが試みられている西夏語は、歴史上の言語なので( )で括り、本資料集の対象外とした。〈川西民族走廊〉の諸言語のなかで、最北の甘肅省にかけて分布し、羌語支には属しないと目されるバイマア〈白馬〉語、および南側に分布するナシ〈納西〉語とイ〈彝〉については、〈羌語支〉の系譜の外側に配置しておいた。表中のA~Oは地図上分布域の記号、▲印は本資料集に未収の言語である。



〈川西民族走廊〉 [日] せんせいみんぞくそうろう [中] Chuan<sup>1</sup>xi<sup>1</sup>min<sup>2</sup>zu<sup>2</sup>zou<sup>3</sup>lang<sup>2</sup>  
 [英] The ethnic corridor in Western Sichuan.

〈羌語支〉 [日] きょうごし/チアングシ [中] Qiang<sup>1</sup>yu<sup>3</sup>zhi<sup>1</sup>  
 [英] Qiangic [tʃ(j)áɕɔ(g)ɪk] チアングック

英語:	family	division	branch	group
中国語:	〈～語族〉	〈～語群〉	〈～語支〉	〈～語組〉
日本語:	「～語族」	「～語派」	「～語支」	「～語群」

資料の翻訳にあたり、言語グループの用語は概ね上の対応関係で訳出したが、グループ化の概念が一致しない場合もあるため、必要に応じ記述言語での用語も表示しておい

た。バイマア〈白馬〉語は Bodic (branch)〈藏語支〉, ナシ〈納西〉語とイ〈彝〉語は Loloish (branch)〈彝語支〉に分類され, Qiangic (branch)〈羌語支〉とは別の系譜関係にあると考えられている。

### 3 〈川西民族走廊〉地域の言語地図

1. *Language Atlas of China*. Edited by The Australian Academy of the Humanities and The Chinese Academy of Social Sciences, Hong Kong: The Longman Group (Far East) Ltd. 1987.

中国語版：朗文《中國語言地圖集》1987年 C-11 Tibetan Dialects (C-10 Tibeto-Burman Languages)

2. 「チベット語方言分布図」

西 義郎「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11巻4号 1986年

3. 〈八江流域民族語言分布示意圖〉

孫宏開〈六江流域的民族語言及其系屬分類〉《民族學報》1983年第2期

4. R. E. アシャー／クリストファー・モーズレイ (土田 滋・福井勝義監修, 福井正子 翻訳)『世界民族言語地図』(東洋書林：2000年)

Christopher Moseley, and R.E. Asher et al. (eds.) *Atlas of the World's Languages*. Routledge, an imprint of Taylor and Francis Books Ltd. 1994.

【解説】〈川西民族走廊〉地域の言語分布について、これまでに作成された言語地図は4種類ある。1の *Language Atlas of China* 《中國語言地圖集》では C-11 Tibetan Dialects がこの地域をカバーするが、全域が民族共通語として普及しているチベット語カム方言および北側の青海高原に広がる遊牧民のアムド方言の2種類に被われていて、その下にある地域語の分布図は収録されていない。いっぽう C-10 Tibeto-Burman Languages はイ〈彝〉語に代表される雲南省に広がるチベット・ビルマ語の分布図であり、〈川西民族走廊〉地域を含まない。1の編集スタッフには David Bradley の名前が見えている。西 (1986) も1985年までに記述されたチベット語方言の詳細なレファランズと地点情報にもとづく地図を掲載するが、チベット語とは異なる独立した少数言語は対象外である。いっぽうチベット語の方言ではない〈川西民族走廊〉地域の諸言語についての分布図は、3の孫 (1983) 掲載の略図が最初のものである。この〈八江流域民族語言分布示意圖〉は基礎資料として今日でもよく利用されているが、略図なのでおおまかな分布域を示しているにすぎず、論文中の言語の概述にも分布地域や使用人口についての詳細な

情報は掲載されていない。またその後の研究の進展により新たに加わった情報や訂正すべき点も少なくない。西田龍雄「西夏王国」『西夏王国の歴史と文化』（岩波書店：1997年）所載の「川西走廊言語分布略図」も孫（1983）附載の地図にもとづいて製作されたものである。4の *Atlas of the World's Languages* は、近年、日本語版の『世界民族言語地図』が出て利用しやすくなった。チベット・ビルマ諸語の記述を担当したのは、こちらも David Bradley である。この地図集においても〈川西民族走廊〉地域は残念ながら中国の全域図である Map 47 のほぼ中央部分に約 6 cm 四方の大きさで示されているのみで、地名も地形の情報もほとんどなく概念図に等しい。縮尺が小さいために分布域の線が錯綜して見づらい。また Map 48 には別途 South-West China として雲南省の拡大図を掲載するが、〈川西民族走廊〉地域はその南端部に分布するナムイ、シヒン、プミ語の一部が含まれているのみである。Map 47 で〈川西民族走廊〉地域を覆うチベット語方言分布の線の引きかたをみると、上述の *Language Atlas of China* 《中国語言地圖集》の C-11 にほぼ同じであることから、Map 47 はこれをベースに孫（1983）などの情報を加えて作成したものかと思われる。このほか同書の解説において Qiangic の諸言語の話し手の人口はよくわからない、とした上で挙げている概数は孫教授の記述に一致すること、また sTau あるいは Daofu ではなく Ergong という言語名を使用していることから孫教授の情報によっていることがわかる。ただし地図と解説の作成にあたり、Liu Huiqiang [劉輝強] 氏のサポートがあったという記されていることが注目される。劉氏は現地調査にもとづく独自の情報を持っていたと考えられるからである（後述の《甘孜藏族自治州民族誌》の【解説】を参照）。

#### 4 《中国少数民族語言使用情況》のデータ

中国社會科學院民族研究所、國家民族事務委員會文化宣傳司 主編《中国少数民族語言使用情況》（中国藏學出版社：1994年）

【解説】中国の少数民族の言語の使用状況についての統計データを1冊に集めたレファランズブックである。巻末に「全国各少数民族人口主要分布及語言使用情況統計表」があり、同書のあとがきによれば1982年に行なわれた第3回全国人口調査の資料に基づいて編集したと明記されている。それによるとチベット〈藏〉族の人口は387万（附載の1990年の第4回全国人口調査の資料では、4,593,330人）で「使用言語または方言」欄の注記には「主にチベット語を使用、約25万人ほどギャロン〈嘉戎〉語、チアン〈羌〉語、プミ〈普米〉語および漢語を使用する者がある」とある。このうち四川省のチベット〈藏〉族の人口は92.2万人で「使用言語または方言」欄の注記には「多くはカム〈康〉

方言を使用するが、アムド〈安多〉方言を使用する者も少数おり、約10万人がギャロン〈嘉戎〉語を使用、4万人強がチアン〈羌〉語を使用、プミ〈普米〉語を使用する者が約2.6万人いる」とある。以下、四川省内各縣内のチベット〈藏〉族の人口と使用言語についての注記を訳出する。これにより縣単位での使用言語の概況が把握できるだろう。なお中国の行政単位は、州-縣-區-郷-（村）という区分になっている。

縣名	人口	言語使用状況
平武縣	2,836	大多数が漢語を使用するようになった。
北川縣	1,447	同上
漢源縣	1,469	大多数は漢語を使用するようになったが、一部“アルス〈爾蘇〉語”を話す者もいる。
石棉縣	4,723	大多数は漢語を使用するようになったが、“ムニャ〈木雅〉語”を話す者も少数いる。
宝興縣	3,476	大多数が漢語を使用するようになった。
汶川縣	8,287	ギャロン〈嘉戎〉語を使用。
理縣	1.57万	同上
松潘縣	2.07万	アムド〈安多〉方言放牧区土語
南坪縣	1.15万	同上
金川縣	2.85万	ギャロン〈嘉戎〉語東部方言
小金縣	2.11万	同上
黒水縣	4.59万	チアン〈羌〉語北部方言を使用、3千人余がチベット〈藏〉語アムド〈安多〉方言を使用、1千人がギャロン〈嘉戎〉語を使用。
馬爾康縣	3.12万	ギャロン〈嘉戎〉語北部および西部方言
壤塘縣	2.17万	アムド〈安多〉方言放牧区土語
阿壩縣	3.9万	同上
若爾蓋縣	4.29万	同上
紅原県	1.88万	同上
康定縣	4.47万	カム〈康〉方言、一部“ムニャ〈木雅〉語”を話す者もいる。
丹巴縣	3.17万	大多数はカム〈康〉方言を使用するが、アムド〈安多〉方言放牧区土語を使用する者も少数おり、9千人余がギャロン〈嘉戎〉語を使用する。

九龍縣	1.02万	大多数はカム〈康〉方言を使用するが、プミ〈普米〉語あるいは“ムニャ〈木雅〉語”を使用する者も少数いる。
雅江縣	3.02万	カム〈康〉方言、一部“ジャバ〈扎巴〉語”“チョユ〈却隅〉語”を話す者もいる。
道孚縣	3.26万	一部はカム〈康〉方言を使用、アムド〈安多〉方言放牧区土語を使用する者もあり、約2万人がギャロン〈嘉戎〉語を使用、“ダウ〈道孚〉語”“ジャバ〈扎巴〉語”を話す者もいる。
爐霍縣	2.79万	
甘孜縣	4.82万	カム〈康〉方言、新龍と理塘には“チョユ〈却隅〉語”を話す者もいる。
新龍縣	3.04万	
徳格縣	4.99万	
白玉縣	3.28万	
石渠縣	5.3万	
色達縣	2.72万	
理塘縣	3.84万	
巴塘縣	4.03万	
郷城縣	2.1万	カム〈康〉方言
稻城縣	2.16万	同上
得榮縣	1.32万	同上
木里藏族自治州	3.01万	大多数はプミ〈普米〉語を用い、少数はカム〈康〉方言を用いる。
鹽源縣	4,640	プミ〈普米〉語北部方言を使用。
冕寧縣	3,870	漢語を使用するようになったが、甘洛では一部に“アルス〈爾蘇〉語”を使用する者もいる。
越西縣	1,867	
甘洛縣	2,877	

## 5 《甘孜藏族自治州民族誌》の記載

康定民族師專編寫組《甘孜藏族自治州民族誌》（當代中國出版社：1994年）

第一篇 藏族 第五章 文化、芸術、科技 第一節 語言文字 126-128頁



【解説】中国の地方行政単位から出版されている各種の地方誌に掲載されている民族誌の類いは政治的な目的で編纂されたものが多く、必要とする情報が得にくいなかにあつて、本書はガンツェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉の少数民族についての基本情報が豊富に集められていて有用である。チベット族の言語に関する記述はごく簡単なものではあるが、ガンツェ州内の地域語〈地脚話〉についても記載があり、これまで知り得なかった分布の地点情報が記されている。本資料集に収録するにあたってはチベット族の言語全体に関わる部分をまず訳出し、同書が地域語〈地脚話〉と呼んでいる羌語系の諸語に関する記述は、各言語ごとの項目に分けた。同書のあとがきによれば、この部分の執筆担当者は楊嘉銘（康定師專教授）である。該文の参考文献を知るために同書巻末の参考文献一覧から言語関係のみを抜粋してまとめておいた。なかに数編、容易に参照しにくい劉輝強氏の論文も見えるところから、言語の分布域に関する資料の主な部分は、劉氏の情報にもとづくものであろう。

## 5.1 カム〈康〉方言

チベット語はシナ・チベット語族〈漢藏語系〉のチベット・ビルマ語派〈藏緬語族〉のチベット語群〈藏語支〉に属する。カム方言はチベット語支3大方言（ウー・ツァン〈衛藏〉・アムド〈安多〉・カム〈康〉）のひとつで、一般に「カンゲ *kams skad*〈康格〉」と呼ばれており、四川省甘孜藏族自治州、青海省玉樹藏族自治州、雲南省迪慶藏族自治州、および西藏昌都地区、那曲地区、林芝地区と阿里地区の一部に分布する。この方言を話すチベット族はおおむね100万人余いる。カム方言はウー・ツァン・アムド方言に比べて内部の差異が比較的大きく、さらに南路、北路、中路、牧区の四つの語群に分けることができ、なかでも北路語群のデルゲ〈徳格〉方言が代表的なものとされている。カム方言はガンツェ州のチベット族の主要な言語コミュニケーションの道具となっており、アムド方言や地域語〈地脚話〉を話す地域でも一般に通用している。中華人民共和国成立以降は、カム方言のガンツェ州における通用範囲はしだいに拡大しており、地域語を使用する機会と区域はしだいに縮小しつつある。ガンツェ州に移り住んで長い漢族やその他の少数民族の国家公務員、労働者のなかには、業務と生活の必要から、カム方言を学び使用する者も少なくない。州内の各種学校のチベット語教育においては、基本的にカム方言を教育言語としている。

## 5.2 アムド〈安多〉方言

チベット語3大方言のひとつで、一般に「ヂョツゲ *'brog skad*〈卓格〉」あるいはニウチャンホア〈牛場話〉と呼ばれている。我が国のチベット地域の放牧地帯に広く通用しており、方言内部は比較的一致し、土語群の区分はない。ガンツェ州内では、色達全

縣、甘孜、爐霍、道孚、康定、理塘、雅江縣などの遊牧地区のチベット族はアムド方言を使う。

### 5.3 ギャロン〈嘉戎〉語

ギャロン〈嘉戎〉語はシナ・チベット語族〈漢藏語系〉のチベット・ビルマ語派〈藏緬語族〉に属するが、語群〈語支〉の帰属については、現在なお議論がある。ギャロン語のなかでもさらに違いがあつて、東部、西部、西北部の三つの方言区に分けられる。

ギャロン語は主にアバチベット族チアン族自治州〈阿壩藏族羌族自治州〉内の大小金川流域地区（すなわち歴史上の「四土」地区）に分布し、俗に「四土語」と呼ばれている。ガンツェ州丹巴縣内でギャロン語を使うチベット族は約1万人、全県のチベット族人口の3分の1ほどを占める。主に丹巴縣の北部の巴底郷、および東北部で小金縣に隣接する太平橋郷、半扇門郷と岳扎郷に分布する。現地のチベット族は巴底郷のことばを代表とする上述の地域のギャロン語を「バディ〈巴底〉語」と呼ぶが、言語の特徴と分布地域からギャロン語の西部方言に属するものと見られる。

### 5.4 地域語〈地脚話〉

新龍、道孚、爐霍、丹巴、康定、雅江、九龍などの縣内には、さらに数多くのカム方言、アムド方言とは異なる語群〈語支〉が存在しており、ひとつひとつはこれをまとめて「ロンゲ rong skad〈絨格〉」と呼び、漢語ではこれを「土地のことば」di<sup>4</sup>jiao<sup>3</sup>hua<sup>4</sup>〈地脚話〉と呼んでいる。それぞれの「土地のことば」を話すチベット族は、その地域では自分の「土地のことば」で話し、地域の外に出たときには、カム方言か簡単な漢語を話せる場合が普通である。(1)〈木雅語〉→ムニャ語 (2)〈魚通語〉→グイチョン語 (3)〈道孚語〉→ダウ語 (4)〈扎巴語〉→チョユ語/ジャバ語 (5)〈爾蘇語〉→アルス語 (6)〈納木義語〉→ナムイ語 (7)〈普米語〉→プミ語 (8)〈曲域語〉→チョユ語

【《甘孜藏族自治州民族誌》の(1)～(8)の言語についての記述は、矢印で示した各言語の資料として附載した。各言語の概述を参照。】

●《甘孜藏族自治州民族誌》卷末附録所載の参考資料（言語関係のみを抜粋）

孫宏開〈六江流域民族語言及其系屬分類——兼述嘉陵江上游、雅魯藏布江流域的民族語言〉《民族學報》1983年3期 雲南民族出版社

劉輝強〈明正土司屬地的民族語言概況〉《雅礮江上游考察報告》【未見。】

劉輝強〈木雅語研究〉《雅礮江上游考察報告》【未見。】

劉輝強〈道孚縣民族語言調查〉《四川民族史誌》1989年3期【未見。】

黄布凡〈木雅語概況〉《民族語文》1985年3期

孫宏開〈試論邛籠文化與羌語支語言〉《民族研究》1986年2期

多爾吉〈川西藏區的革什咱話〉《西南民族学院學報》1988年“民族語言文學專集”

馬月華〈丹巴的地脚話－語言考實散記〉《康定師專學報》1988年1期【未見。】

## 6 チベット語方言の資料

【解説】ロングマンの《中國語言地圖集》のチベット語方言分布図(C-11)を見ればわかるように、〈川西民族走廊〉全域はチベット語方言に覆われており、〈川西民族走廊〉諸語の話し手の大部分は、チベット〈藏〉族としてのアイデンティティを有している。ここでは〈川西民族走廊〉諸語をより深く理解するうえで必要と思われるチベット語方言(カムおよびアムド)の音韻、語彙、文法の全体像がわかる記述報告の代表的な文献のみを選んで掲げ、参考に供する。チベット語の教材および辞書は〈川西民族走廊〉地域の諸語の現地調査にも不可欠である。なおチベット語研究のレファランスは膨大な量になるので〈川西民族走廊〉の諸言語に直接何らかの影響を与えたと考えられる方言関係の主要な文献に限定し、文語および中央チベット方言に準拠する共通語などに関する著作等は収録していない。必要があれば貞兼綾子編の文献目録などを参照されたい。【 】内は編者のコメント。

### ● 総論

格桑居勉《藏語方言概要》(中央民族学院教材(油印):1964年)

第一章 導言 第二章 衛藏方言 第三章 康方言 第四章 安多方言

【チベット語方言の詳細な記述として中国の研究者がよく引用する資料であるが、正式には出版されていない。改訂版がまもなく中国藏學出版社より刊行予定という。】

胡坦〈第一章 藏語〉《漢藏語概論》(上)(北京大學出版社:1991年)

【胡(1991)の方言についての記述は、主として格桑居勉(1964)によっている。】

金鵬《藏語簡誌》(中国少数民族語言簡誌叢書,民族出版社:1983年)

西 義郎「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11巻4号1986年

西 義郎「ヒマラヤ地域のチベット・ビルマ系言語研究の動向」『国立民族学博物館研究報告』25巻2号2000年

【チベット語諸方言の地域分布については、この西(1986)が最も詳しい。亀井 孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻【世界言語編】(中)(三省堂:1989年)のチベット語の項目には、簡略版の西 義郎「V. チベット語現代諸方言」が収録されて

いる。また中国国内外のチベット・ビルマ語についての広範かつ最新の研究動向については西(2000)を併せて参照されたい。】

貞兼綾子編『チベット研究文献目録—1877~1977』(亜細亜大学アジア研究所:1982年)

貞兼綾子編『チベット研究文献目録II—1978~1995』(高科書店:1997年)

チベット語カム方言

●教材

馬月華《基礎藏文課本(康方言)》4冊(西南民族學院教材:1987年)

【音韻と文法の解説は、ほとんど格桑居勉(1964)の康方言の記述によっている。】

Kraft, Geolge C., and Tsering Hu Heng. *Tibetan-English Colloquial Primer: Kham Dialect*. Littleton, Colorado: OMF Books. 1990.

【英語で記述されたカム方言の入門書。例文はチベット文字のみで発音表記はない。】

●方言総述

Migót, André. Recherches sur les dialectes tibétains du Si-K'ang (province de Kams). *Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient* 48.2.

【古い記述ではあるが、カム方言の全体的な輪郭と発音の体系がわかる唯一の概述。】

チベット語アムド方言

●教材

敏生智, 耿顕宗《安多藏語會話選編》(青海民族出版社:1992年)

Kalsang Norbu, Karl A. Peet, Dpal Dlan Bkra Shis, and Kevin Stuart. *Modern Oral Amdo Tibetan: A Language Primer* (Studies in Linguistics and Semiotic5) Edwin Mellen Press. 2000.

●辞書

華侃, 龍博甲《安多藏語口語詞典》(甘肅民族出版社:1993年)

## 7 〈川西民族走廊〉の諸言語に関する主要文献

●総論

馬學良 主編《漢藏語概論》(上/下)(北京大學出版社:1991年)

胡坦〈第一章 藏語〉 黃布凡〈第二章 羌語支〉

戴慶厦〈第三章 景頗語支, 第四章 緬語支, 第五章 彝語支〉

戴慶厦, 王天習〈第六章 語支未定的語言〉

馬學良他《藏緬語新論》(中央民族學院出版社：1994年)

●各語概述

戴慶廈他《藏緬語十五種》(北京燕山出版社：1991年)

黃布凡〈道孚語，扎壩語，木雅語〉 王天習〈却域語〉

黃布凡，仁增旺姆〈呂蘇語，納木茲語，史興語〉

孫宏開〈六江流域的民族語言及其系屬分類——兼述嘉陵江上游，雅魯藏布江流域的民族語言〉《民族學報》第3期(雲南民族出版社：1983年)

〈貴瓊語，爾蘇語，爾龔語，扎巴語，木雅語，納木義語，史興語，普米語，獨龍語 & 怒語，白馬語，僂語，珞巴語，門巴語，夏爾巴語〉

【各言語について語例と例文を挙げ，音韻／語彙／文法の構造を概述する。言語分布図〈八江流域民族語言分布示意圖〉を付載。】

孫宏開〈川西民族走廊地區的語言〉《西南民族研究》(四川民族出版社：1983年)

〈爾蘇語，納木義語，史興語，木雅語，貴瓊語，爾龔語，扎巴語〉

【羌語系7言語の社会的状況と構造の特徴を略述したもので，具体的な語例や例文などによる言語構造の記述は含まない。LTBAに英訳が掲載されている。】

Sun, Hongkai. Languages of the ethnic corridor in Western Sichuan. Translated by Jackson T.-S. Sun. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 13.1. 1990.

●語彙資料

《藏緬語語音和詞匯》編寫組編《藏緬語語音和詞匯》(中國社會科學出版社：1991年)

黃布凡主編《藏緬語族語言詞匯》(中央民族學院出版社：1992年)

【中国国内のチベット・ビルマ諸語の対照語彙集。出版年も近く編集方針もよく似ており，書名も非常に紛らわしいので，略記する際にはSTEDTの略号に倣い，孫編《藏緬語語音和詞匯》(中國社會科學出版社)は中国語タイトルのピンイン表記：Zan-Mian yu yuyin he cihui から《ZMYYC》とし，黄編《藏緬語族語言詞匯》(中央民族學院出版社)は英語のタイトル：A Tibeto-Burman Lexiconにより《TBL》として区別する。《ZMYYC》は1,004語，《TBL》は1,822語を収録する。】

●レファランス

Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Monograph Series:

Randy J. LaPolla, and John B. Lowe with Amy Dolcourt. *Bibliography of the International Conferences on Sino-Tibetan Languages and Linguistics I-XXV* (STEDT Monograph 1A) Berkeley: University of California. 1994.

James A. Matisoff with Stephen P. Baron, and John B. Lowe. *Languages and Dialects of Tibeto-Burman* (STEDT Monograph 2) Berkeley: University of California. 1996.

Ju Namkung (ed.) *Phonological Inventories of Tibeto-Burman Languages* (STEDT

Monograph 3) Berkeley: University of California. 1996.

- 学術雑誌 【〈川西民族走廊〉の諸言語についての情報が掲載される主要な研究誌。】

《民族語文》 中國社會科學院 [隔月刊]

【《100期總目錄》1996年8月（非売品）がある。】

*Linguistics of the Tibeto-Burman Area* University of California, Berkeley. [年2回刊]

【Vol. 24.2 に cumulative index, vols. 1-24 が掲載されている。】

《語言暨語言學》 台灣中央研究院 [年2回刊]

- 系譜分類

孫宏開〈論藏緬語族中的羌語支語言〉《語言暨語言學》第2卷第1期（台灣中央研究院語言學研究所：2001年）

孫宏開〈試論中国境内藏緬語的譜系分類〉Paul K. Eguchi et al. (eds.) *Languages and History in East Asia. Festschrift for Tatsuo Nishida on the Occasion of his 60th birthday.* Kyoto: Shokado. 1988.

戴慶厦, 劉菊黄, 傅愛蘭〈關於我國藏緬語族系屬分類問題〉

原載は《雲南民族學院學報》1989年,

戴慶厦《藏緬語族語言研究》（雲南民族出版社：1990年）および

馬學良他《藏緬語新論》（中央民族學院出版社：1994年）に再録。

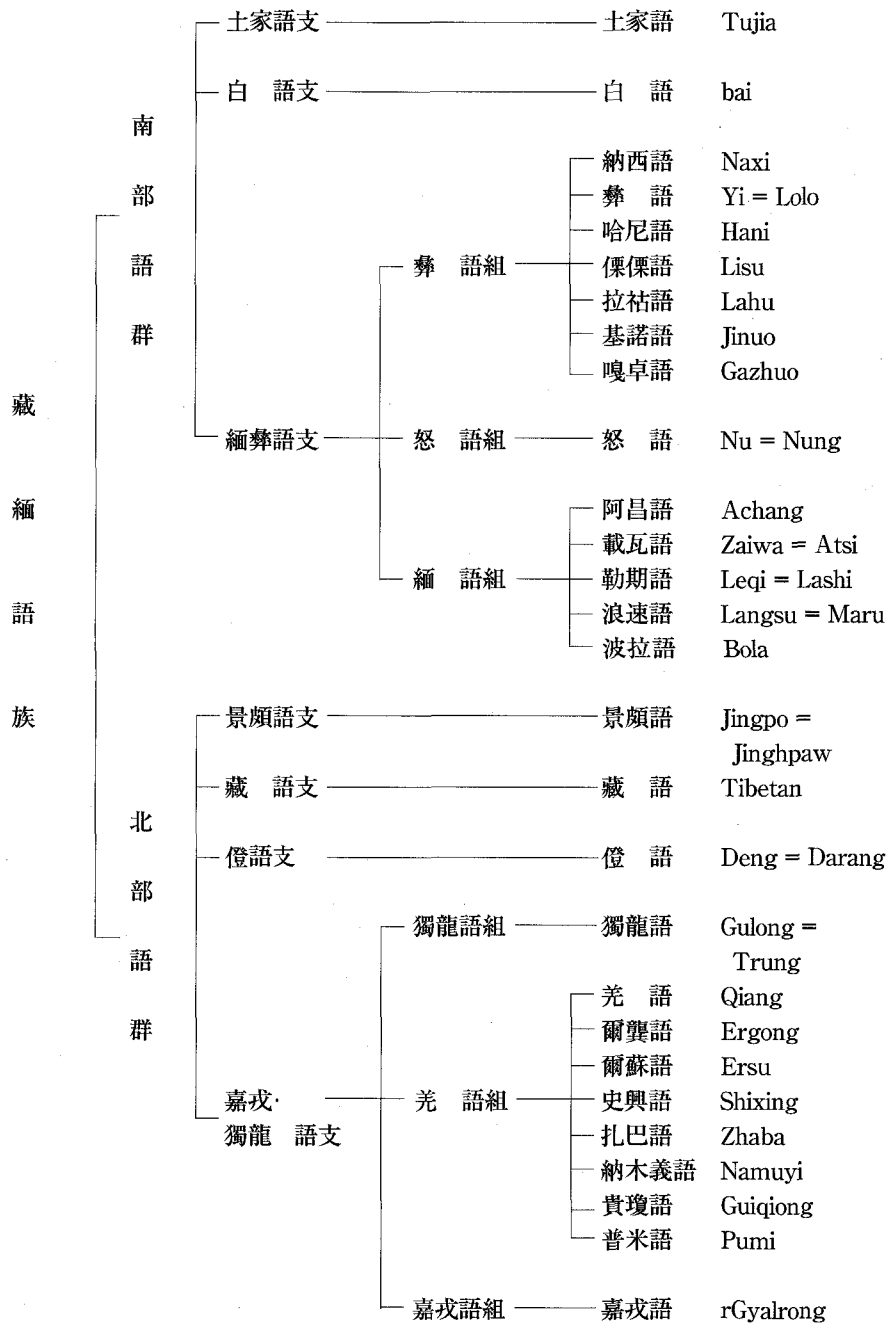
Matisoff, James A. The languages and dialects of Tibeto-Burman: An alphabetic/genetic listing, with some prefatory remarks on ethnonymic and glossonymic complications. *Contributions to Sino-Tibetan Studies*. Edited by J. McCoy, and T. Light. Leiden: E. J. Brill. 1986.

David Bradley. Tibeto-Burman Languages and Classification. *Tibeto-Burman Languages of The Himalayas*. The Australian National University. 1997.

## 8 中国の藏緬語の系譜分類

【解説】中国国内のチベット・ビルマ語についての代表的な系譜分類図を掲げておく。Aは戴慶厦教授によるもの、Bは孫宏開教授によるものである。本資料集では最新の研究成果を反映させるべく孫教授の分類に若干の改訂を加えたものを利用している。このほか中国国外で参照されているスタンダードな系譜分類として STEDT の Monograph に採用されたものと *Atlas of the World's Languages* の解説に記された分類を掲げ、注意すべき異同についてはコメントを付しておいた。

●中国の藏緬語の系譜分類 A 【戴慶厦ほか(1994)により, 英語名を追加した。】



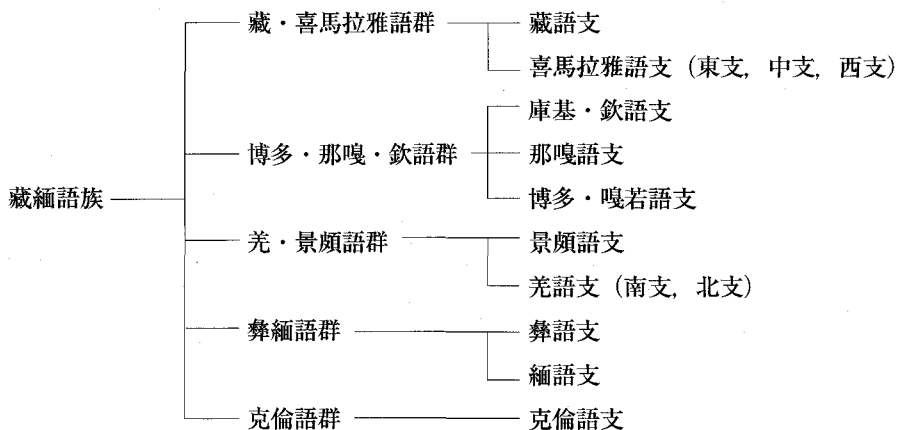
【解説】系譜分類Aは、戴慶厦、劉菊黄、傅愛蘭〈關於我國藏緬語族系屬分類問題〉による。この論文の原載は《雲南民族學院學報》1989年、のち戴慶厦《藏緬語族語言研究》（雲南民族出版社：1990年）および馬學良他《藏緬語新論》（中央民族學院出版社：1994年）に転載された。この図はさらに戴慶厦 主編《二十世紀的中國少數民族語言研究》（書海出版社：1998年）にも転載されており、中国のチベット・ビルマ諸語の系譜図として、よく知られているもののひとつである。〈羌語組〉に含まれる言語については、その後の研究の進展により変更すべき点がいくつか生じているほか〈羌語組〉から〈嘉戎語組〉を独立させ〈獨龍語組〉とともに〈嘉戎・獨龍語支〉を建てる分類については、孫（2001）に批判が展開されているので、併せて参照されたい。

●中国の藏緬語の系譜分類 B 【孫宏開（1983／2001）などによる。】

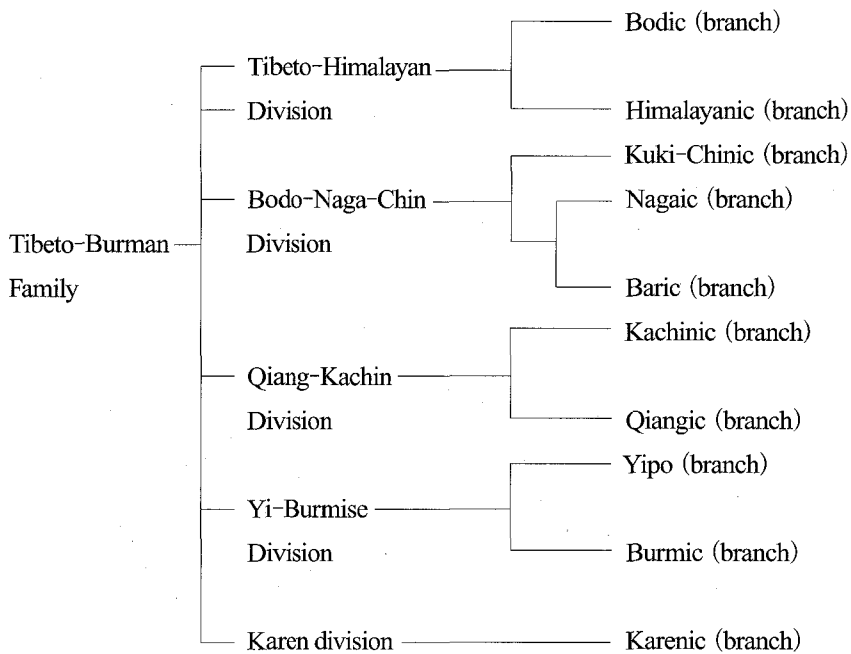
[藏緬語族の系譜分類] 孫宏開（1983）〈六江流域〉

1. 藏 語支： 藏語，門巴語（2種），白馬語。
2. 彝 語支： 彝語，納西語，哈尼語，白語，拉祜語，基諾語，傣僳語，土家語。
3. 羌 語支： 羌語，普米語，嘉絨語，木雅語，爾龔語，史興語，爾蘇語，貴瓊語，扎巴語，納木義語。
4. 景頗語支： 景頗語，獨龍語，僜語（2種），珞巴語。
5. 緬 語支： 阿昌語，載瓦語，怒語。

[藏緬語族の系譜分類] 孫宏開（2001）およびSun（1995）による。

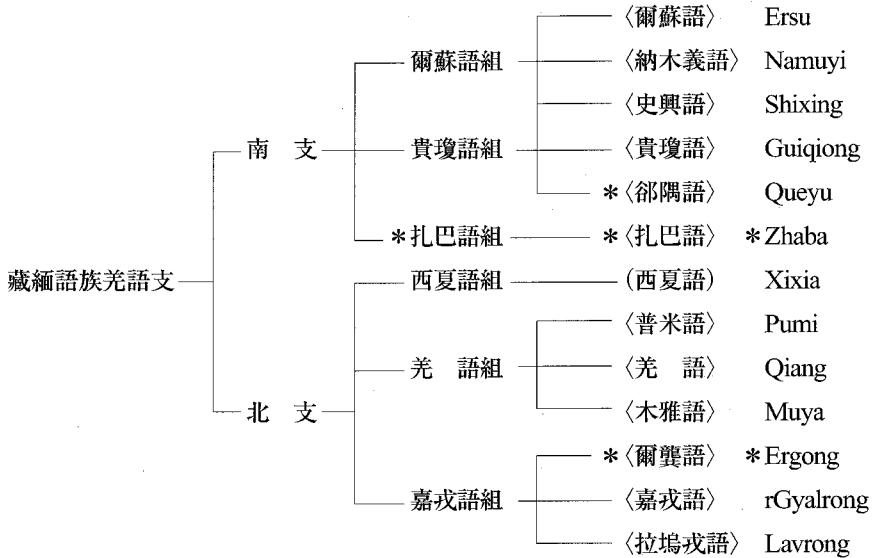






(a) 【この系譜図には中国語版と英語版があり，対照すると音訳漢字で表示されている中国国外の言語グループ名が理解しやすい。英語版は Sun, Hongkai. A further discussion on verb agreement in Tibeto-Burman languages. *Hew Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*. Edited by Yoshio Nishi, James A. Matisoff, and Yasuhiko Nagano. (Senri Ethnological Studies 41) Osaka: National Museum of Ethnology. 1995. に見える。ただし〈彝語支〉を Yipo (branch) とするのは理解に苦しむ。〈彝語支〉は通常 Loloish と呼ばれている。】

[羌語支諸語の系譜分類] 【孫宏開 (2001) により, 英語名を追加した。問題のある言語名については\*を付してある。】



【解説】[藏緬語族の系譜分類] および [羌語支諸語の系譜分類] は, 孫宏開〈論藏緬語族中的羌語支語言〉《語言暨語言學》第2卷第1期(2001年)による。この論文は〈羌語支〉Qiangicの諸言語の研究史とその系譜分類について詳細な議論と紹介が展開されていて参考価値が高い。同論文では孫宏開/陸紹尊が記述した〈扎巴語〉が誤りであり, 実は〈卻隅語〉(黄布凡教授の表記では〈却域語〉)。この言語名の漢字表記の適切性の問題に関しては本資料集【チョユ語】に収録した《藏緬語十五種》からの抄訳を参照)であったことを認める記述があるいっぽうで, 黄布凡教授が新たに認定した〈扎壩語〉に対し旧来の表記の〈扎巴語〉の文字を当てるのは, 混乱を引き起こす恐れがあるので注意が必要。STEDTでは漢字表記にもとづき, 旧〈扎巴語〉をZha1 ba1, 新〈扎壩語〉をZha1 ba4として漢字音の声調で区別しているからである。STEDTの抜きの基準になったのは, 孫宏開教授の論文のJackson T.-S. Sun [孫天心]による英訳の訳注である。Languages of the ethnic corridor in Western Sichuan. Translated by Jackson T.-S. Sun. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 13.1. 1990. p.15 Translator's Note 15を参照。原文:〈川西民族走廊地區的語言〉《西南民族研究》(四川民族出版社:1983年)。そのほか, 孫宏開教授の使用する言語名のうち, アルゴン語〈爾龔語〉が適切性を欠くことについては, 資料の【ダウ語】の【解説】を参照されたい。

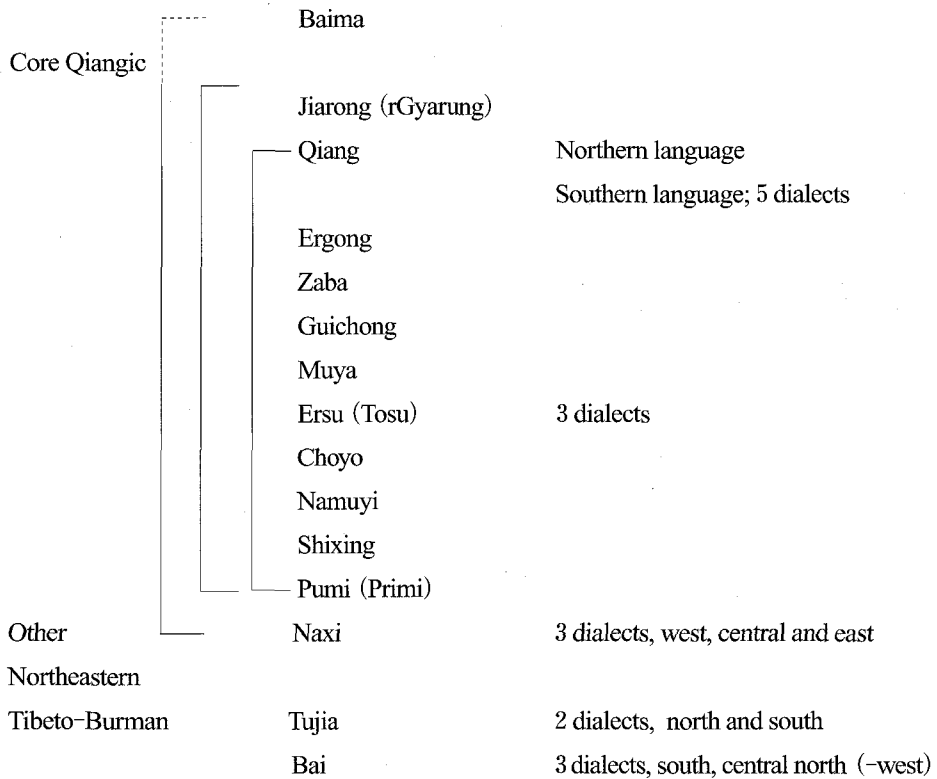
●中国の藏緬語の系譜分類 C 【STEDT Monograph 3 (1994) による。】

Qiangic	【収録方言, データの出典等についてのコメント。】
rGyalrong-Ergong	
rGyalrong	【Zhuokeji / lCog-rtse 〈卓克基〉方言のみを収録。林 1993, Nagano 1984 および孫編《藏緬語族語音和詞匯》=《ZMYYC》の3種類のデータを掲載。】
Ergong	《ZMYYC》
Xixia / Tosu	
Xixia	【西田 1964 / 1966 および Sofronov の再構音の体系を掲載】
Tosu	【西田 1973 により文献から再構された推定音】
Qiang, Northern and Southern	
Northern Qiang	Mawo 〈麻窩〉方言 《ZMYYC》
Southern Qiang	Taoping 〈桃坪〉方言 《ZMYYC》
Other Qiangic	
Ersu	《ZMYYC》
Guiqiong	《ZMYYC》
Lüsu	《藏緬語十五種》
Muya	《ZMYYC》
Namuyi	《ZMYYC》
Pumi	Jinghua 〈箐花〉方言および Taoba 〈桃巴〉方言 《ZMYYC》
《普米語簡誌》	
Shixing	《ZMYYC》
Zhaba	《ZMYYC》
	【のちにチョユ語の1方言と判明した, 孫/陸の〈扎巴語〉。同書では漢字表記に倣い, こちらを Zhābà とし, 黄の記述する〈扎壩語〉を Zhābà と声調で区別する。なお黄の記述する〈扎壩語〉は STEDT Monograph 3 には未収録。】

【解説】 Ju Namkung (editor). *Phonological Inventories of Tibeto-Burman Languages* (STEDT Monograph 3) Berkeley: University of California. 1996. の巻末附載の Major branches of Tibeto-Burman および Index by Subgroup による。データの大部分は孫教授の提供によるものであるが, Lüsu 〈呂蘇〉語を《藏緬語十五種》により追加している。言語名は rGyalrong と Tosu を除き, 現代中国語の漢字音のピンインによる表記である。

STEDT のデータベースでは、歴史文献から再構された Xixia / Tosu 〈西夏／多績〉語をひとつにまとめて Qiangic のグループに加えているが、Tosu 〈多績〉語は Ersu 〈爾蘇〉語の方言と考えられている。

● 中国の藏緬語の系譜分類 C [Atlas of the World's Languages (1993) による]



【解説】 Atlas of the World's Languages (1993) の解説による。言語名は基本的に現代中国語の漢字音のピンインによっているけれども、Zhaba 〈扎巴〉語を Zaba, Guiqiong 〈貴瓊〉語を Guichong, Queyu 〈却域〉を Choyo と表記している点が異なる。

## 9 各言語資料の凡例

---

【グイチョン語】 〈貴瓊語〉 Gui<sup>4</sup>qiong<sup>2</sup> [Guichong] 地図 E  
【カタカナ表記の言語名】 〈中国語漢字〉 漢字音ピンイン [英語表記名] 言語地図上の分布域

---

【解説】 英語名は論文等で引用されている表記で、言語によっては複数がある。そのうちでスタンダードなもの、あるいは適切と考えられるものをゴシック体で表示しておいた。なおこれまでに英語表記名が確認できない言語で、話し手の自称や現地での呼称に基づき、池田の提案するローマ字表記には左肩に\* (アスタリスク) を付してある。

● 使用人口： 以下の文献の記載に基づく概数。

《甘孜州民族誌》

康定民族師專編寫組《甘孜藏族自治州民族誌》(當代中國出版社：1994年)

《六江流域》

孫宏開〈六江流域的民族的民族語言及其系屬分類——兼述嘉陵江上游，雅魯藏布江流域的民族語言〉《民族學報》第3期(雲南民族出版社：1983年)

《ZMYYC》

《藏緬語語音和詞匯》編寫組編《藏緬語語音和詞匯》(中國社會科學出版社：1991年)

《TBL》

黃布凡主編《藏緬語族語言詞匯》(中央民族學院出版社：1992年)

《漢藏語概論》

馬學良主編《漢藏語概論》(上/下)(北京大學出版社：1991年)

《藏緬語十五種》

戴慶廈他《藏緬語十五種》(北京燕山出版社：1991年)

- 記述報告： 各言語の構造の全体についての記述報告のレファランス。
- 各 論： 各言語の諸特徴についてテーマを限定して論じた文献のレファランス。  
文献のリストが長くなる場合には、概述抄訳のあとに掲載。
- 概述抄訳： 《甘孜州民族誌》の記載および分布域の情報が詳しい概述を選んで訳出。  
なお言語名は原文の表記をそのまま用い、対応関係を明らかにした。

【バイマァ語】〈白馬語〉 Bai<sup>2</sup>ma<sup>3</sup> [Baima]

地図 A

【解説】バイマァ〈白馬〉語は〈川西民族走廊〉の諸言語のうちで最も北に分布しており、現在までの研究では Bodic (branch) 〈藏語支〉に分類され、他の〈川西民族走廊〉の諸言語の大部分がグループ化されている Qiangic (branch) 〈羌語支〉とは別の系譜関係にあると考えられている。言語名は自称にもとづくなら \*ベ語とすべきところであるが、雲南省のペー〈白〉語と紛らわしいくなる恐れがあり、また居住地の漢語の地名や歴史的な経緯からすでに〈白馬〉語という名称が定着している。日本語では西田龍雄、孫宏開 共著『白馬譯語の研究』（松香堂：1990年）が刊行されており、その書名から「はくば語」と呼ぶ場合も少なくないが、〈川西民族走廊〉地域の他の言語名が自称またはチベット語からの他称、もしくは中国語音にもとづいて命名されていることから、この言語のみ日本語の漢字音に読みかえて呼ぶのはバランスを欠くと思われるので、中国語と英語の呼称にあわせてバイマァ語と呼ぶのが適当であろうと考える。

## ● 記述報告

西田龍雄、孫宏開『白馬譯語の研究』（松香堂：1990年）

孫宏開〈白馬語〉〈六江流域的民族語言及其系属分類〉所収

## ● 各 論

黄布凡、張明慧〈白馬話支屬問題研究〉《中國藏學》1995年第2期

張濟川〈白馬話和藏語〉（上／下）《民族語文》1994年第2期／第3期

〈白馬語〉：第三章 白馬人の現況『白馬譯語の研究』（43-56頁より抄訳）

バイマァ〈白馬〉人は現在中国四川省綿陽市平武縣の白馬河流域、アバチベット族チアン族自治州〈阿壩藏族羌族自治州〉の南坪縣の下塘地區、松潘縣の小河地區および甘肅省の武都專區文縣の白馬峪河一帯に分布している。同地は甘肅省と四川省との境界にあたる高く険しい山岳地帯であり、面積は約7千平方キロメートルあまり、ジャイアントパンダの生息地として知られる玉朗自然保護區があるところである。1986年現在、バイマァ人は約1万1千人あまりで、費孝通教授が《我が国の民族識別問題について》という論文で言及している〈平武藏人〉というのが、つまりこの〈白馬〉人のことである<sup>1)</sup>。

バイマァ人の居住している地域は、東部と南部は漢【族の居住】地域と境を接し、西部と北部はチベット【族の居住】地域と境を接しており、彼らは大なり小なりに漢族と雑居する状況が見られるが、チベット族と雑居しているのはごくわずかの地域である。

【以下要約】中華人民共和國成立後の1951年、当時の川北行政署は〈民族工作隊〉を派遣して調査をすすめる、民族の上層部の意見をもとに〈白馬〉人を暫定的にチベット族と認定した。その後〈白馬〉人はチベット族との接触の機会が増えるにつれて、言語、服装、風俗習慣、宗教信仰などのあらゆる面でチベット族とは異なる点が多いことがわかり、〈白馬〉人の中から民族識別の調査要求が正式に提出された。四川省民族委員会は党の民族政策を受け、1978年と1979年の2度にわたり〈白馬〉人の調査を実施し、この民族の認定問題について科学的根拠を提供するための豊富な一次資料を収集した。【訳注：この調査資料およびその後に行なわれた民族認定に関わる議論については、のちに《白馬藏人属問題討論集》(四川省民族研究所：1980年)と題する論集が作成されたが、内部資料であり、正式にまとまった形では公刊されていない。孫教授は言語の調査結果から〈白馬〉人はチベット族ではないという立場を表明しているけれども、現在なお〈白馬〉人はチベット人とは異なるという独立した1民族であるという民族認定を受けるに到ってはいない。孫教授の論拠の詳細は、二、白馬人不是藏族(『白馬譯語の研究』44-51頁)を参照されたい。】【…中略…。】

この一帯の少数民族【訳注：〈白馬〉人のこと】の自称は pe<sup>53</sup> (ペ) である。この民族自身の認識によれば、pe<sup>53</sup> (ペ) とは即ち〈番人〉の意味であるとうが、この民族のなかには pe<sup>53</sup> (ペ) とはこの民族全体を指すことばだとする者もいる。しかし pe<sup>55</sup> (ペ) とはチベット族の自称 bod (ボウ) とおなじ語の音変化だと言っている者もいる。

研究の結果〈白馬〉人の自称 pe<sup>55</sup> (ペ) はチベット族の自称 bod とは異なるものである【ことが判明した】。チベット族の自称の bod はこの一帯のチベット族の間では wo<sup>13</sup> と発音され(松潘および南坪上塘一帯)、wo<sup>13</sup>こそがチベット文語の bod の音変化であり、pe<sup>53</sup> とは明らかな発音上の違いがある。もし pe<sup>53</sup> が発音変化の結果だと言うのなら、声母と声調のいずれにおいても、チベット語の音変化の規則に合わない。【以下略。】

【チアン語】(チャン語, きょう語)〈羌語〉 Qiang<sup>1</sup> [Qiang, Ch'iang]

地図 B

【解説】チアン語は〈川西民族走廊〉地域の諸言語のなかでは比較的早くから知られていた言語であり、民族学や歴史学の分野でも注目されてきたこともあって研究の蓄積が多い。ここでは《漢藏語概論》の略述を訳出したが、さらに詳しくはレファランスの概説および記述報告に挙げた文献を参照されたい。なお日本語による言語名は中国語音によりチアン語と表記するのが適当であると考え。×チャン語と表記している文献もあるが、中国語の発音のカタカナ表記として不正確であるうえに、同じチベット・ビルマ

諸語のなかにチャン語（英 Chang：東インドのナガランド州に話される）という言語があるので、混同される恐れがある。さらにはチアン語に代表される〈羌語支〉Qiangic という言語グループ名も「きょうごし」と読みかえるかあるいは「チアン語支」と呼ぶべきであろう。

●概 述

長野泰彦「羌語（きょうご）」亀井 孝・河野六郎・千野栄一 編『言語学大辞典』第2巻【世界言語編】（中）（三省堂：1989年）。

LaPolla, Randy J. *Qiang. Sino-Tibetan languages*. Edited by Graham Thurgood, and Randy J. LaPolla. Surrey, England: The Curzon Press. (forthcoming).

●記述報告

孫宏開〈羌語概況〉《中國語文》1962年 第12期

孫宏開《羌語簡誌》（民族出版社：1981年）

劉光坤《麻窩羌語研究》（四川民族出版社：1998年）

LaPolla, Randy J. with Huang Chenglong. *Grammatical sketch of the Qiang language, with texts and annotated glossary*. ms., City University of Hong Kong. 1997.

Evans, Jonathan P. *Introduction to Qiang phonology and lexicon: Synchrony and diachrony*. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies. 2001.

〈羌 語〉：《漢藏語概論》〈羌語支〉

チアン〈羌〉族は四川省アバチベット族チアン族自治州〈阿壩藏族羌族自治州〉の茂，汶川，理，松潘などの縣とガンヅェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉の丹巴縣および綿陽專區の北川縣の一部の地区に分布している。全人口は145,000人あまりで、そのうちの約60%が茂縣に居住している。集中して居住している地域のチアン族はチアン語と漢語に通じており、雑居地域のチアン族は漢語を使うことが多い。アバチベット族チアン族自治州の黒水縣に居住するチベット人もチアン語を使うので、チアン語の使用人口は約10万人前後である。

チアン〈羌〉語は南北の2大方言に分かれる。南部方言は主に茂，汶川，理，松潘などの各縣の南部と汶川縣の大部分の區や郷に分布し、さらに大岐山，桃坪，龍溪，綿池および黒虎の五つの下位方言（土語）に分けられる。北部方言は主に茂縣沙壩區窪底郷と赤不蘇區および黒水縣の大部分の地区に分布し、さらに蘆花，茨木林，麻窩，維古，雅都の五つの下位方言（土語）に分けることができる。方言土語内部での差違もかなり大きい。

茂縣のチアン人の自称は zme（汶川，理縣の自称は hma，黒水の自称は rma）である。チアン族は我が国の古い民族のひとつであり、歴史上の分布は広範囲に及んだ。岷



江上流域は漢の時代には氏, 羌, 冉, 駘などの部落の分布地域であった。漢の武帝の時代に一部の羌人が甘肅, 青海から南下した。魏晋南北朝時代には西北の宕昌, 鄧至の羌人が南遷した。唐初にはもともと(黄)河, 湟一帯のタンゲート(黨項)羌人のうちの細封氏らの部落が松潘, 茂, 汶一帯に遷居した。これらの前後して茂, 汶一帯に移動して定住した氏, 羌の部落は数千年にわたる融合発展を経て一つになり, 現在の羌族を形成するに至ったと考えられている。

#### ●各 論

Benedict, Paul K. Qiang monosyllabization: A third phase in the cycle. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 7.2. 1983.

Chang, Kun. A comparative study of the Southern Ch'iang dialects. *Monumenta Serica*, XXVI. 1967.

何星俊〈羌語曲谷話和龍溪話音系比較〉《羌族研究》第1輯 1991年

何星俊〈羌語疊式複音詞語構型初探〉《羌族研究》第2輯 1992年

黃布凡〈羌語語音演變中排斥鼻音的趨勢〉《民族語文》1987年第5期

黃布凡〈羌語的體範疇〉《民族語文》2000年第2期

黃成龍〈羌語複輔音的演變〉《羌族研究》第2輯 1992年

黃成龍〈中國少數民族語言檔案:羌語榮紅話〉(中國社會科學院民族研究所:1993年)

黃成龍〈羌語形容詞研究〉《語言研究》1994年第2期(總第27期)

黃成龍〈羌語音位系統分析芻議〉《民族語文》1995年第1期

黃成龍〈羌語動詞的前綴〉《民族語文》1997年第2期

黃成龍〈羌語音節弱化現象〉《民族語文》1998年第3期

黃成龍〈羌語存在動詞〉《民族語文》2000年第4期

劉光坤〈羌語中的藏語借詞〉《民族語文》1981年第3期

劉光坤〈羌語輔音韻尾研究〉《民族語文》1984年第4期

劉光坤〈論羌語代詞的“格”〉《民族語文》1987年第4期

劉光坤〈羌語複輔音研究〉《民族語文》1997年第4期

劉光坤〈論羌語聲調的產生和發展〉《民族語文》1998年第2期

劉光坤〈論羌語動詞的人稱範疇〉《民族語文》1999年第1期

劉輝強〈羌語木蘇話音系〉《羌族研究》第1輯 1991年

孫宏開〈羌語動詞的趨向範疇〉《民族語文》1981年第1期

孫宏開〈羌語〉《中國少數民族語言使用情況》(中國藏學出版社:1994年)

聞宥〈論黑水羌語中之 Final Plosives〉《華西協合大學中國文化研究所集刊》1卷 1940年

聞宥〈川西羌語之初步分析〉《華西協合大學中國文化研究所集刊》第2卷 1941年

聞宥 (汶川瓦寺組羌語音系) 《中國文化研究所彙刊》第3卷 1943年

Wen, Yu [聞宥] Verbal directive prefixes in the Jyarong language and their Ch'iang equivalents. (嘉戎語中動詞之方向前置及其羌語中之類似) 《華西協合大學中國文化研究所集刊》第3卷 1943年

聞宥 (汶川蘿蔔寨羌語音系) 《華西協合大學中國文化研究所集刊》第3卷 1943年

聞宥 (理番語二枯羌語音系) 《華西協合大學中國文化研究所集刊》第4卷 1945年

Wen, Yu [聞宥] On the origin of certain emphatic consonants in Ch'iang Dialects. (羌語方言中若干強子音之來源) 《華西協合大學中國文化研究所集刊》第6卷 1947年

聞宥 (記西昌羌語的元音) 《中國文化研究所彙刊》第8卷 1948年

聞宥 (汶川羌語詞彙簡編 附拉丁化文字初稿) 《華西協合大學中國文化研究所集刊》第9卷2號 1950年

【ギャロン語】(嘉戎語) Jia<sup>1</sup>rong<sup>2</sup> [Jiarong, rGyalrong]

地図 C

【解説】ギャロン語は(川西民族走廊)地域の諸言語のなかでは比較的大きな言語であり、研究の蓄積も多い。本資料集では、使用人口、方言区分、分布地域について、《漢藏語概論》の略述および《嘉戎語研究》の前書きの一部を訳出しておいた。さらに詳しくは Nagano (1984)、林 (1993) 瞿 (1990) などを参照されたい。

#### ● 概 述

長野泰彦「ギャロン語」「ギャロン語系」亀井 孝・河野六郎・千野栄一 編『言語学大辞典』第2巻【世界言語編】(中) (三省堂:1989年)

Nagano, Yasuhiko. Cotse rGyalrong. *Sino-Tibetan Languages*. Edited. by Graham Thurgood, and Randy J. LaPolla. Surrey, England: The Curzon Press. (forthcoming).

Sun, Jackson T.-S. Caodeng rGyalrong. *Sino-Tibetan Languages*. Edited. by Graham Thurgood, and Randy J. LaPolla. Surrey, England: The Curzon Press. (forthcoming).

#### ● 記述報告

Nagano, Yasuhiko. *A Historical Study of the rGyalrong Verb System*. Tokyo: Seishido. 1984.  
林向榮《嘉戎語研究》(四川民族出版社:1993年)

〈嘉戎語〉:《漢藏語概論》

四川省西部のチベット人の一部が話す言語の一つである。主に四川省アバチベット族チアン族自治州(阿壩藏族羌族自治州)の馬爾康, 金川, 小金, 理, 汶川などの縣お

よびガンツェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉の丹巴縣と雅安專區の寶興縣の一部の地区に分布する。使用人数は10数万におよぶ。町に住みギャロン語を話すチベット人の多くは漢語にも通じている。ギャロン語は東部、北部、西部の三つの方言に分かれる。

ギャロン語を使うチベット人の自称は *kəru* (馬爾康) あるいは *kəra* (理縣) である。チベット語で上述の地域を *rgya rong* と呼ぶので、慣習上この言語をギャロン〈嘉戎〉(*rgya rong* の音訳) 語と呼んでいる。歴史学者の研究によれば、《舊唐書・東女國傳》に記載のある“哥鄰”は *kəru* の音訳であり、《隋書・附國傳》の“嘉良”と《新唐書・兩巒蠻傳》の“嘉梁”は *rgya rong* の音訳だとのことである<sup>2)</sup>。

#### 〈嘉戎語〉：《嘉戎語研究》

ギャロン〈嘉戎〉語は、四川省西北部のチベット地区のチベット族の一部の人びとが話す言語の一つである。主に四川省アバチベット族チアン族自治州〈阿壩藏族羌族自治州〉の馬爾康、金川、小金、壤塘(上寨區と杜科區)、紅原(三壤口一帶)、黒水(蘆花郷と沙石多郷)、理縣、汶川などの縣の全域あるいは一部の地域に分布する。【訳注：壤塘に分布する言語については、ラヴロン〈拉塢戎〉語の項を参照】およびガンツェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉の丹巴と道孚兩縣と雅安專區の寶興縣の一部の地区【に分布する】。ギャロン語は東部、西北部、および西部の三つの方言に分けられる。

東部方言はアバ〈阿壩〉州の州府の所在地であるバルカム〈馬爾康〉のことばに代表され、通用する面積は最も広く、話す人もいちばん多い。最近のアバ、ガンツェ兩州の縣政府、縣誌事務室、人口調査事務室、および雅安地區委員会など関係諸機関の提供する第4回全国人口調査の最新の信頼できる統計によれば、東部方言の使用人口は13万8251人である。

西北部方言は馬爾康縣の四大壩地区の〈草登〉のことばまたは〈日部〉のことばに代表され、使用人口は1万2197人である。

西部方言は金川縣中寨區の〈二崗里〉のことばに代表され、使用人口は4万9276人である。

以上のギャロン・チベット族の三つの方言を話す人口総数は合計19万9724人にのぼる。【…中略…】

このほか、研究者のなかにはガンツェ州の爐霍、新龍、色達などの縣の一部の地域のチベット族はダウ〈道孚〉語(私たちの考えではダウ語とはギャロン語の西部方言のことである)を話すとする者もいる<sup>3)</sup>ので、もしこれらの地区の話し手の人数を加算するならば、ギャロン・チベット族の人口総数は20数万を数えることになるだろう。【しかし】これらの地区の言語の状況については、今後さらに調査が進むのを待たなくてはならな

い。

ギャロン語はシナ・チベット語族〈漢藏語系〉のチベット・ビルマ語派〈藏緬語族〉に属する言語であるが、どの語支に属するかという問題については今なお定説がない。今後の研究の進展と検討が待たれている。

●各 論 【記述研究の代表的なもの。】

Chang, Kun [張琨], and Betty Shefts Chang. rGyalrong historical phonology. *Bulletin of Institute of History and Philology*. 46.3. 1975.

黄良榮〈嘉戎語前綴 tā tō kā kō の語法作用〉《民族語文》1993年第3期

Dai Qingxia, and Yanmuchu. On the status of tones in the Suomo dialect of rGyalrong. *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. 15.2. 1992.

戴慶厦, 嚴木初〈嘉戎語梭磨話の聲調〉馬學良他《藏緬語新論》(中央民族學院出版社:1994年)

金鵬 Étude sur le Jyarong. 《漢學》3 1949年

金鵬, 譚克讓, 瞿鸞堂, 林向榮〈嘉戎語梭磨話的語音和形態〉《語言研究》2:1957年, 3:1958年

林向榮〈嘉戎語構詞法研究〉《民族語文》1982年第3期

林向榮〈嘉戎語與藏語的若干語法差異〉《中國民族語言論文集》1986年

林向榮〈關於嘉戎語的聲調問題〉《中央民族學院學報》1989年第5期

林向榮〈嘉戎語馬爾康話中的藏語借詞〉《民族語文》1990年第5期

Nagano, Yasuhiko. A historical study of rGyalrong initials and prefixes. *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. 4.2. 1979.

Nagano, Yasuhiko. A historical study of rGyalrong rhymes. *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. 5.1. 1979.

Nagano, Yasuhiko. *A Historical Study of the rGyalrong Verb System*. Tokyo: Seishido. 1984.

長野泰彦「ギャロン語の方向接辞」『季刊人類学』15巻3号 1984年

長野泰彦「ギャロン語の動作の様態を示す接辞」『国立民族学博物館研究報告』9巻3号 1984年

長野泰彦「ギャロン語の人称接辞」『国立民族学博物館研究報告』9巻4号 1985年

長野泰彦「ギャロン語の能格性」『国立民族学博物館研究報告』10巻3号 1985年

長野泰彦「嘉戎語動詞句における接辞の統辞意味論的分析」山口瑞鳳編『チベットの社会と文化』(春秋社:1986年)

長野泰彦「嘉戎語の基本構造」『国立民族学博物館研究報告』26巻1号 2001年

瞿霽堂〈嘉戎語動詞の人稱範疇〉《民族語文》1983年第4期

瞿霽堂〈嘉戎語概況〉《民族語文》1984年第2期

瞿霽堂〈嘉戎語の方言——方言劃分和語言識別〉《民族語文》1990年第4期, 第5期

Sun, Jackson T.-S. [孫天心] Parallelisms in the verb morphology of Sidaba rGyalrong and Lavrung in rGyalrongic. *Language and Linguistics* 1.1. Academia Sinica, 2000.

Sun, Jackson T.-S. [孫天心] Stem alternations in Puxi verb inflection: Toward validating the rGyalrongic subgroup in Qiangic. *Language and Linguistics* 1.2. Academia Sinica, 2000.

Wen, Yu [聞宥] Verbal directive prefixes in the Jyarong language and their Ch'iang equivalents. 《華西協合大學中國文化研究所集刊》3卷 1943年

聞宥〈論嘉戎語動詞之人稱尾詞〉《中國文化研究所彙刊》4卷2號 1944年

---

【ラヴロン語】〈拉塢戎語〉 La'wu<sup>4</sup>rong<sup>2</sup> [Lavrung]

地図 C & D

---

●各 論

黃布凡〈觀音橋話語屬問題研究〉《語言暨語言學》第2卷第1期 2001年

尹蔚彬〈業隆話概況〉《民族語文》2000年第6期

【〈業隆話〉は、四川省金川縣周山區集沐鄉業隆村の90戸450人前後が話している言葉で、隣接するギャロン語とは相通じないが、〈觀音橋話〉の約3分の1は聞いてわかるという。ラヴロン語の下位方言のひとつと見られる。】

●使用人口

黃 (2001) 〈觀音橋話〉: 約1万人強, 孫 (2001) 〈羌語支語言〉: 1万人前後

〈觀音橋話: 簡介〉: 〈觀音橋話語屬問題研究〉

グワンインチャオホア〈觀音橋話〉というのは、中國四川省金川縣觀音橋鎮（以前は中寨區と呼んでいたが、1996年に改名して觀音橋鎮となった。さらに早い時期には綽斯甲と呼ばれていた。）の所轄地区およびその近隣一帯で話されている言語である。觀音橋鎮の管轄下には觀音 (græmdε), 二嘎里 (rgæni) 俄熱 (ɛAVZi), 太陽河 (ɛnə/ts'amtu) 等の四つの郷と阿柯里 (ak'orε) 國營牧場であり、前者の三つの郷と太陽河の一つの村および阿柯里の半数の住民はみな觀音橋話を話し、約1万人強である。この言語を話す人の自称はラヴロンヴァ〈拉塢戎哇〉(lavzunjva)あるいはロンヴァ〈戎哇〉(zunjva)といい、この言葉のことをラヴロンホア〈拉塢戎話〉あるいはロンホア〈戎話〉と呼んでいる。この言語の話し手からの情報によると、〈觀音橋話〉は東は馬爾康縣白灣區木爾宗郷 (bzunjzunj) と金川縣周山區集沐郷の業隆村 (dzazə) まで通じ、

西は壤塘縣上寨區蒲西郷の蒲西・小伊里と斯躍武などの村まで通じるとのことである<sup>4)</sup>。業隆村と蒲西郷の三つの村にはそれぞれ500人くらいが住んでいる。

〈観音橋話:結語〉:〈観音橋話語屬問題研究〉

比較の結果を総合するなら、〈観音橋話〉はギャロン語〈嘉戎語〉でもダウ語〈道孚語〉でもない独立した言語とすべきである。このことは孫天心(2000a)の結論に一致する。孫天心は〈木爾宗話〉を〈観音橋話〉に分け入れて、現地の話し手の感覚と一致するとしているが、上述した文法項目の比較の結果からすると、〈木爾宗話〉は〈観音橋話〉に非常によく一致するわけでもなく、いくつかの特徴についてはギャロン語北部方言の〈草登話〉のほうがより近い。〈業隆話〉もややギャロン語西部方言に近い特徴がある。木爾宗と業隆は地理的にもギャロン語地区に接近しており、これらは〈観音橋話〉のなかでギャロン語の影響を比較的大きく受けた2方言と考えられる。孫天心の調査によれば、蒲西郷の大伊里村と杜柯河の北側の蒲西村と小伊里村の言葉は霍爾巴・上寨語に属し、杜柯河の南側の蒲西村、小伊里村と斯躍武村は〈観音橋語〉に属している。〈観音橋語〉の中心地をなす観音橋鎮、俄熱、二嘎里などの土地の人は自称をラヴロン〈拉場戎〉(lavzun)あるいはロン〈戎〉(zun)ということから、この言語はラヴロン語〈拉場戎語〉と命名すべきであろう。

【ダウ語】 〈道孚語〉 Dao<sup>4</sup>fu<sup>2</sup> [× Ergong < rgu, sTau]

地図 D

【解説】孫(1983)〈六江流域〉および《ZMYYC》ではいずれもアルゴン〈爾龔〉語と表記し、国内外でこの名称が襲用されているが、この呼称は不適切である。アルゴン ergong < rgu とは現地の言葉で「牛」「畜生」という意味で、自称でも地域名でも他称でもない。台湾中央研究院の Sun, Jackson T.-S. [孫天心] 教授はホルバ〈霍爾巴〉語と呼ぶが、これも適切な名称ではない。詳細は下に訳出した《藏緬語十五種》の黄布凡教授の論考を参照。黄布凡教授の記述した道孚で話されるダウ語と孫宏開教授の記述した丹巴で話されているゲシヅァ語とでは発音がかなり異なること、または独立した言語ではなくて、ギャロン語〈嘉戎語〉の西部方言だとする説:瞿霽堂(1990)〈嘉戎語的方言〉、林向榮(1993)《嘉戎語研究》などがあったことによるものであろう。現在では道孚で話されるダウ語と丹巴で話されるゲシヅァ語は方言の関係にあって、ギャロン語とは別の独立した言語であり、さらにダウ語とギャロン語の分布域の中間に位置するラヴロン〈拉場戎〉語がダウ語の方言でもなくギャロン語の方言でもない独立の言語であると認定されるに至っている。

●記述報告

黄布凡〈道孚語〉《藏緬語十五種》所収

孫宏開〈爾龔語〉〈六江流域的民族語言及其系屬分類〉所収

多爾吉《道孚語格什扎話研究》(中國藏學出版社:1998年)

●各 論

黄布凡〈道孚語語音和動詞形態變化〉《民族語文》1990年第5期

多爾吉〈川西藏區格什扎話〉《西南民族学院學報》1988年 民族語言文學研究專輯

多爾吉〈川西北藏區格什扎話音系分析〉《西南民族学院學報》1992年 藏語文研究專輯第2期

Wang, Stephen S. Consonantal clusters of Tibetan loanwords in Stau. *Monumenta Serica*. 1970-1971.

林向榮〈方言(11) 西部方言丹巴土語格什雜話音系介紹〉《嘉戎語研究》(四川民族出版社:1993年)所収

●使用人口

〈六江流域〉爾龔語:約3.5万人前後,《ZMYYC》爾龔語:約3.5万人前後,《藏緬語十五種》道孚語:約45,000人,《漢藏語概論》〈羌語支〉道孚語:4万人強,《TBC》道孚語:45,000人,《甘孜州民族誌》:約35,000人

〈道孚語〉:《甘孜州民族誌》

この言語を話すチベット族の自称は「プウ bod〈布〉」もしくは「プウバ bod pa〈布巴〉」で、チベット語ではこれを「ダウゲ rtau skad〈道場格〉」と呼んでおり、学術的には「アルゴン〈爾龔〉語」と呼んでいる。この言語を話すチベット族は主にアパ〈阿壩〉藏族羌族自治州の金川縣、馬爾康縣、壤塘縣に含まれる一部の地区およびガンツェ〈甘孜〉州の丹巴、道孚、新龍、爐霍などの縣の一部の地区に分布している。このうち道孚縣では10の郷に分布する:八美區の沙冲郷および尼措區の孔色郷、麻孜郷、格西郷、葛卡郷、鮮水郷、そして瓦日區の瓦日郷、木茄郷、上甲郷、下甲郷である。爐霍縣では蝦拉沱區の仁達郷、斯木郷、宜木郷、および羅柯馬區の羅柯馬郷である。新龍縣では河東區の蔓青郷、博美郷である。丹巴縣では大桑區の丹東郷、革什咱郷、邊爾郷、および金川區の巴旺郷と聶呷郷である。ダウ語の下位方言区分〈土語區〉はかなり複雑であり、目下調査研究が進められているところだが、道孚縣内に限って言えば、すでに概ね明らかになっており、四つの下位方言区に分けられる。鮮水郷土語區(鮮水、格西、瓦日、麻孜、葛卡、木茄などの郷を含む)、上甲郷土語區(上甲、下甲の2郷を含む)、沙冲郷土語區(丹巴縣の大桑區の語音に一致)、孔色郷土語區(孔色郷および爐霍縣蝦

拉沱区所属の郷を含む)である。ダウ語を話すチベット族は、ガンツェ〈甘孜〉州内で約35,000人である。

〈道孚語〉：《藏緬語十五種》

ダウ〈道孚〉語は四川省ガンツェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉の道孚、丹巴、爐霍、新龍などの縣とアパチベット族自治州〈阿壩藏族自治州〉の金川、馬爾康、壤塘などの縣の一部のチベット〈藏〉族の住民の話している言語である。使用人口は約45,000人。この地区にはさらに2種類のチベット語方言が分布しており、農区はカム〈康〉方言に属し、牧区はアムド〈安多〉方言に属する。ここでいうダウ〈道孚〉語とはこのふたつのチベット語方言とは差異が大きく、互いに話の通じない一種の独立した言語を指している。この言語を話す人びとのなかには、一部は漢語にも通じている者もあり、一部にチベット語アムド方言に通じている者もいる。

ダウ語の方言や〈土語〉の状況はまだ十分な調査や比較が行なわれてはいないが、この言語を使用する者の話では、各地のことばの互に通じる程度の違いに応じて、ダウ語は概ねダウ〈道孚〉、ゲシツァ〈革什扎〉、グワンインチャオ〈観音橋〉の3方言に分けることができる。ダウ〈道孚〉方言は道孚縣城關(尼措)區、瓦日區、八美區沙冲郷、【訳注:《漢藏語概論》ではさらに色達縣色爾壩區果洛托郷を挙げる】、新龍縣河西區蔓菁、朱倭と多占などの郷、爐霍縣の蝦拉坨區仁達郷に分布する。ゲシツァ〈革什扎〉方言は丹巴縣大桑区革什扎、丹東、邊爾などの郷、川古區東谷郷、金川區巴旺、金川などの郷に分布する。グワンインチャオ〈観音橋〉方言は、金川縣の観音橋區、馬爾康縣北窪區の毛兒宗、黨壩などの郷、壤塘縣の普西郷に分布する。【訳注:のちにグワンインチャオ〈観音橋〉のことばは、ダウ語の方言ではなく独立した言語と認められた。】

ダウ語を話す住民のうち、道孚縣境に分布する者は自称を *stɛ wu va* 〈道孚人〉といい、チベット文字(本稿では一律 IPA で転写【訳注:ワイリー方式の転写に改め、Bold で表記】)では〈道孚〉を *sta'u* もしくは *rta'u* と表記している;ゲシツァ〈革什扎〉地区に分布する者は自称を *ge ci tsa ve* 〈革什扎人〉といい、チベット文字では〈革什扎〉を *dge shes tsa* と綴る;新龍縣に分布する者は自称を *mə ɲa wa* 〈木雅〉<sup>5)</sup>、観音橋一帯に分布する者は自称を *lav zuŋ va* また【訳注:《漢藏語概論》では色達縣色爾[土壩]區に分布する者の自称は] *zuŋ va* という。統一した自称がないので、この言語に対してさまざまな命名が行なわれる結果となっており、研究者の文章中のこの言語についての呼称には、ダウ〈道孚〉語<sup>6)</sup>、ホル〈霍爾〉語<sup>7)</sup>、アルゴン〈爾龔〉語<sup>8)</sup> などがある。ホルとアルゴンには別な意味も含まれるので、ダウ方言の使用人口が比較的多く、使用者がより集中して居住していることも考慮して、本稿ではダウ語



という名称を採用した<sup>9)</sup>。

ダウ〈道孚〉語の系譜上の位置付け〈支属問題〉をめぐるには、いろいろな考えが提出されており、ギャロン語の西部方言とするもの<sup>10)</sup>、早期はチベット語の方言であったとするものもある<sup>11)</sup>。筆者はダウ語はギャロン語やチベット語とは異なる独立した言語であると考えている。深層構造から見ると、ダウ語は音声、語彙、文法の諸相において、とくに文法上のかなり多くの特徴が羌語支の言語に近いので、その系譜上の位置付けはチベット・ビルマ語派〈藏緬語族〉チアン語支〈羌語支〉に含まれよう。

ここではガンツェチベット族自治州の道孚縣城關區格西郷尼彎村のことばを代表として、ダウ語の音韻体系と語彙、文法の特徴を簡潔にまとめて紹介する。

---

【ムニャ語】 〈木雅語〉 Mu<sup>4</sup>ya<sup>3</sup> [Menia, \*Mu<sup>4</sup>nya, Minyak, Manyak] 地図 H

---

【解説】 ムニャ語は話し手の自称により、チベット文献に *Mi nyag* と記される西夏との関係が注目されたため、早くから漢字表記の〈木雅〉が定着している。国外の資料でも漢字の標準語音のピンインをもとに言語名を *Muya* とし、日本でもムーヤー語と呼んでいる場合が多い。しかしこれは漢字表記を日本漢字音で「モクガ」語と読んでいるに等しい。この表記はもともと彼らの自称に対して四川方言音によって漢字を当てたものなので、英語なら *Mu<sup>4</sup>nya*、日本語ではムニャ語と呼ぶほうが適切である。英語名をアポストロフィーで区切るのは、ムンヤと読んでもしまう可能性があることによる。事実、ある西南中国の民族誌の日本語訳にホジソンの表記による *Manyak* をマンヤクと誤記している例があった。本資料集ではムニャ語の記述報告に限定し、歴史研究の論考は収録していない。孫宏開教授はムニャ語東部方言についても言及しているが、東部方言の記述報告はまだない。現地を訪れた研究者の談話などからの情報では、話し手の数はすでにごく少数と予測されるため、至急の調査が望まれる。

#### ● 記述報告

黄布凡 〈木雅語概況〉《民族語文》1985年第3期、《藏緬語十五種》に再録

孫宏開 〈木雅語〉〈六江流域の民族語言及其系属分類〉

林英津 〈木雅語資料：獅子與兔子的故事〉李範文主編《首屆西夏學國際學術會議論文集》(寧夏人民出版社：1998年)

#### ● 各 論

池田 巧 〈木雅語語音結構的幾個問題〉『内陸アジア言語の研究 XIII』1998年

池田 巧 「ムニャ〈木雅〉語の再発見と存亡」三元社『ことばと社会』2号 1999年

## ●使用人口

〈六江流域〉：15,000人前後，《ZMYYC》：約1.5万人，《藏緬語十五種》：記載なし，《漢藏語概論》：1万人強，《TBC》：約1万人，《甘孜州民族誌》：約12,000人

## 〈木雅語〉：《甘孜州民族誌》

主に四川省西部のミニヤコンガの周囲の康定、九龍、雅江、石棉4縣にわたって分布しており、この言語を話すチベット族は現在のところ約12,000人である。

ムニャ〈木雅〉語は東部と西部の二つの方言区に分けられる。ガンツェ〈甘孜〉州内では、九龍縣の灣壩郷、洪壩縣に分布し、この言語を話すチベット族は“ムニェ〈木勒〉”と自称する。ムニャ語東部方言区に属し、漢語の影響をわりに大きく受けている。九龍縣の湯古郷、康定縣の沙徳郷、六巴郷、普沙絨郷、朋布西郷および雅江縣の祝桑郷に分布し、この言語を話すチベット族は“ムニャ〈木雅〉”と自称する。(こちらは)西部方言区に属し、チベット語カム方言の影響がわりに大きい。州内でムニャ語を話すチベット族は約10,000人いる。歴史上、ムニャ語が使われた地域はカンディン〈康定〉縣の榮官區、道孚縣八美區、雅江縣の曲喀區の一部の地区に及んだが、現在ではこれらの地区では一般にカム方言が使われている。

## 〈木雅語〉：〈六江流域〉

ムニャ〈木雅〉語は四川省ガンツェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉の康定、九龍、および雅安地区の石棉などの縣に分布しており、基本的にミニヤコンガの主峰を取り巻く東、南、西の3面に居住し、使用人口は約15,000人前後である。九龍【縣】灣壩、洪壩および雅安地区の石棉縣に分布するムニャ〈木雅〉人は自称を  $mu^{55}na^{55}$  といい、ムニャ語東部方言を話す。康定縣の沙徳區、および九龍縣の湯古一帶に分布するムニャ人は自称を  $bo^{35}pa^{55}$  といい、老人の中には自称を  $mu^{55}nɛ^{55}$  とする者も少数いて、彼らはムニャ語西部方言を話す。西部方言はチベット語の影響をわりに大きく受けており、東部方言は漢語の影響をわりに大きく受けている。東部方言【を話す】住民は一般にチベット語を話すことができず、少数の宗教活動に従事する者だけが片言の怪しげなチベット語を話すけれども、家庭と村落および居住地域ではムニャ語を主たるコミュニケーションの道具としており、役人と外出の機会の多い者はかなり流暢に漢語が話せる。西部方言を話す住民は家庭や村の中でムニャ語を話すほか、大多数の人が土地のチベット語(カム方言)を話すことができ、なかにはチベット文語に精通した少数の学者もいて、流暢に漢語を話せる者は逆に非常に少ない。ミニヤコンガによって隔てられているために、この二つの方言を話す人びとの間での往来がないばかりか、互いに相手の存在すら知らないほどである。彼らの言語には相当な違いがあるけれども、基礎的な語

彙と文法構造は一致する。

---

【プミ語】 〈普米語〉 Pu<sup>3</sup>mi<sup>3</sup> [Pimi, \*Prumi]

地図 M

---

● 概 述

Picus Sizhi Ding Prinmi. *Sino-Tibetan Languages*. Edited. by Graham Thurgood, and Randy J. LaPolla. Surrey, England: The Curzon Press. (forthcoming).

● 記述報告

陸紹尊《普米語簡誌》(中国少数民族語言簡誌叢書, 民族出版社: 1983年)

孫宏開〈普米語〉〈六江流域的民族語言及其系属分類〉所収

傅愛蘭《普米語動詞の語法範疇》(中國文史出版社: 1998年)

● 使用人口

《普米語簡誌》: 普米族約2万2千, 普米語を話すチベット族約2万5千, 〈六江流域〉: 普米族約2万2千人前後, 普米語を話すチベット族約3万人に近い, 《ZMYYC》: 南方方言約24,000人, 北方方言約30,000人, 《漢藏語概論》: 約47,000人, 《TBC》: 普米族29,675人 (1990年), 普米語使用人口約47,000人, 《甘孜州民族誌》: 中華人民共和國成立後普米族と認定された者約23,000人

〈普米語〉: 《甘孜州民族誌》

この言語は雲南省の蘭坪, 寧蒭, 維西, 永勝, 麗江などの縣で話されており, これらの地区に居住してプミ語を話す住民は, 中華人民共和國成立後「プミ〈普米〉族」と認定された。全部で約23,000人。四川省涼山州の木里縣, 鹽源縣, およびガンヅェ〈甘孜州〉の九龍縣内でプミ語を話す住民は, 中華人民共和國成立後, チベット族とされた。「プミ」とは, プミ語を話す住民の「自称」である。プミ語を話すチベット族の九龍縣における分布はつぎのとおり。三岩龍郷, 八窩龍郷の上堡子, 下堡子, 中堡子, 王家堡子, 白台などの自然村, 魁多郷の里五, 江浪, 甲壩, 魁多, 海底, 先令などの自然村, 下團郷, 子耳郷の大堡子, 杜公, 西藏溝などの自然村である。

〈普米語〉: 《漢藏語概論》

プミ〈普米〉族は主に雲南省の蘭坪, 寧蒭, 維西, 永勝, 麗江などの縣に分布しており, 迪慶藏族自治州の中甸, 維西, 德欽などの縣にも少数が分散して居住しており, 合計約22,000人である。プミ族はプミ語を使用し, その大部分が漢語あるいはそのほかの近隣の民族語にも通じている。このほか, 四川省の木里, 鹽源, および九龍などの縣の

チベット族の一部にもプミ語を話すものが約25,000人おり、そのうち木里縣の人数が最も多く、約18,000人である。プミ語の使用人数は合計47,000人になる。

プミ語は南北のふたつの方言に分けられ、南部方言は雲南省の蘭坪、維西、永勝、麗江などの縣および寧蒭縣の新營盤區に分布し、北部方言は主に四川省の木里、鹽源、九龍などの縣および雲南省寧蒭縣の永寧區に分布している。方言どうしの間では語彙と発音の差違がわりに大きい、文法の違いは少ない。

蘭坪のプミ人の自称は  $phz\bar{a}^{55} mi^{55}$  「白い人」である（九龍の自称は  $phz\bar{i}^{55} mi^{55}$ 、その他の地方の自称には  $phz\bar{o}^{55} m\bar{a}^{55}$  もしくは  $t\bar{s}h\bar{o}^{55} mi^{55}$  がある）。歴史的な記載によれば、プミ族はもともと青藏高原すなわち青海、甘肅、四川の境界一帯の遊牧部落に居住しており、のちに高度の高い寒冷地帯から横断山脈に沿ってしだいに南下して移動し、13世紀以降になってから上述の地域に次々と移ってきて定住したのだという。

【\*チャバ語】 〈扎壩語〉  $Zha^1ba^4$  [Zhaba, \*nDrapa]

地図 F

【解説】 黄布凡教授が記録したチャバ語。陸紹尊が〈扎巴語概況〉（《民族語文》1985年第2期）という文章で紹介したジャバ語〈扎巴語〉とは異なる言語である。道孚縣に話されており、この言語を話す人々の居住地名によりこちらがチャバ語と呼ぶべき言語であって、陸紹尊の記述した言語はチョユ〈却域〉語の方言であると判明した。言語名については、誤解された旧ジャバ語〈扎巴語〉に関する文書が早くから公開されていたため、いろいろな資料にそのまま引用されているので、注意が必要である。漢字表記では陸／孫の〈扎巴語〉に対して、黄〈扎壩語〉として区別される。これにもとづきSTEDTでは前者を  $Zha^1ba^1$ 、後者を  $Zha^1ba^4$  と漢字音の声調で区別している。日本語では〈扎巴語〉をジャバ語、〈扎壩語〉をチャバ語で区別したい。〈扎壩語〉の英語表記はSTEDT以外に用例を見ないので、チベット語にもとづき自称に近い \*nDrapa を提案し、〈扎巴語〉の Zhaba と区別するのがよいと考える。なお孫宏開教授は〈論藏緬語族中的羌語支語言〉（《語言暨語言學》第2卷第1期 2001年）でこの誤りを認めたが、チャバ〈扎壩語〉に対して旧来の漢字表記〈扎巴〉を当てているので、かえって混乱を引き起こす恐れがある。

●記述報告

黄布凡〈扎壩語概況〉《中央民族學院學報》1990年第4期、《藏緬語十五種》に再録

●使用人口

《藏緬語十五種》：7,700人余、《漢藏語概論》〈羌語支／扎壩語〉：7,700人余、《TBL》：

7,700人余 (1986年)

〈扎壩語〉：《藏緬語十五種》

チャバ〈扎壩語は四川省ガンヅェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉のチベット族の一部で使われている言語である。道孚縣扎壩區と雅江縣扎麥區に分布するが、ふたつの地域の話し言葉の差異は大きくなく、お互いに聞いて理解することができる。使用人口は合わせて7,700人あまりである。チャバ語は一般に家庭内と村のなかで使われ、外部とのコミュニケーションには漢語が多く使われる。

チャバ語を使う人びとその居住地のことを *ndza<sup>33</sup> pa<sup>55</sup>* と呼び、この地域の人のことを *ndza<sup>33</sup> pi<sup>55</sup>* 〈扎人〉と呼んでいる。チベット語の綴りでは、*ndza<sup>33</sup> pa<sup>55</sup>* は *'dra pa* であり、扎壩區は *'dra stod* (ヂャトウ〈扎兌〉、「上扎」の意)、扎麥區は *'dra smad* (ヂャメ〈扎麥〉、「下扎」の意)と書かれる。もとはいずれも乾寧縣の所轄地域であったが、1978年に乾寧縣の県制が廃されたのちはヂャトウ〈扎兌〉は道孚縣に組み入れられてチャバ〈扎壩〉と改称、ヂャメ〈扎麥〉は雅江縣に組み入れられたが名称はそのままヂャメ〈扎麥〉となった。

チャバ語は周囲の言語とはいずれも互いに相通じない。北部の隣接地域ではダウ〈道孚〉語が使われ、南部の隣接地域ではチョユ〈却域語〉が使われており、西部と東部の隣接地域ではチベット語カム方言が通用している。このチャバ〈扎壩〉語と陸紹尊が〈扎巴語概況〉(《民族語文》1985年第2期)という文章で紹介したジャバ語〈扎巴語〉とは差異が極めて大きく、同じ言語ではない。我々の理解では、この文章が〈扎巴語〉とよぶ言語を使用している人びとは自称を *va<sup>35</sup> tsi<sup>55</sup> pi<sup>55</sup>* といい、*ndza pa* という自称ではない。この言語は本書【訳注：《藏緬語十五種》のこと】で我々が紹介するチョユ〈却域〉語の1方言であると考えられる。

---

【チョユ語】 〈却域語〉 *Que<sup>4</sup>yu<sup>4</sup>* [Queyu, Choyo, \*Choyu]

地図 G

●記述報告

王天習〈却域語〉《藏緬語十五種》所収

●使用人口

《藏緬語十五種》：約7,000人あまり，《TBC》：約7,000人前後，《漢藏語概論》〈羌語支〉：約7,000人，《甘孜州民族誌》：記載なし

〈曲域語〉：《甘孜州民族誌》

この言語を話すチベット族は自称を「ペーツ〈貝子〉」といい【訳注:後述の《漢藏語概論》に引く雅江縣の團結郷に居住する者の自称の発音を参照】、雅江、および新龍地区の雅魯江と鮮水河の合流点の三角流域区内に分布する。これまでのところ研究者によっては「曲」というのは新龍の土地のチベット語で「陶」を指すことから、「曲語」を話すチベット族は制陶で有名なのでこの呼称があるのだというが、この言語の帰属問題と分布については更なる調査研究を待つ必要がある。

〈却域語〉:《藏緬語十五種》

チョユ〈却域〉語は四川省甘孜藏族自治州新龍、雅江、理塘三縣の境界地域のチベット族が使用している言語である。主に新龍縣下占區の尤拉西 (zu<sup>13</sup> la<sup>55</sup> xei), 孜拖西 (tsi<sup>55</sup> tho<sup>55</sup> xei) の二つの郷、雅江縣團結郷の一部の村落と普巴戎郷、および理塘縣の君壩區の某郷と尕瓦區の仁達郷などの地に分布しており、使用人口は約7,000人あまりである。

チョユ〈却域〉語には統一的なきまった名称はないようである<sup>12)</sup>。新龍縣の当該地区の人びとによれば、彼らの話すこのことばを tcho<sup>55</sup> ke<sup>55</sup> と呼んでおり、tcho<sup>55</sup> ke<sup>55</sup> の話されるすべての地域を、雅江、理塘の所轄地を含めて tcho<sup>55</sup> y<sup>55</sup> と呼んでいる。もしこの二つの単語に含まれる -ke<sup>55</sup> と -y<sup>55</sup> がチベット語から借用した形態素の -skad (語) -yul (地方) に由来するものであるとすれば、彼らの言語と居住地域名はそれぞれチョ語〈却語〉とチョ地〈却地〉とすべきところである。チョ〈却〉の意味と来源はまだよくわからないため、我々は【話されている】地域を考慮して「チョユ〈却域〉語」と呼んでおくことにしたい。

チョユ語はチベット語からの影響が小さくないが、チベット語の方言では決してありえない。また羌語と比べてみると、その違いも大きい。我々は一種の独立した言語として、シナ・チベット語族〈漢藏語系〉のチベット・ビルマ語派〈藏緬語族〉のチアン語支〈羌語支〉に位置付けられると考える。

手許にある材料から考えると<sup>13)</sup>、普巴戎、孜拖西、尤拉西の3カ所の言語はかなり近い関係にあり、はっきりした共通点は子音連続が多いことである。それに対して雅江縣團結郷のチョユ語においては、子音連続はわずかに残る程度に過ぎない。

チョユ語を話す人びとはみなチベット族に含まれるため、他の地域のチベット族とは密接なつながりがあり、成年はみなチベット語にも通じ好んで使い、チョユ語は家庭内や村びと同士の間でのみ使用する。

〈却域語〉:《漢藏語概論》〈羌語支〉

ガンツェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉新龍、雅江、理塘縣の一部のチベット

族が話す言語である。新龍縣下占區の尤拉西鄉，理塘縣呷哇區と君壩區の二つの郷，雅江縣の普巴戎郷，團結郷と扎麥區の一つの郷に分布する。使用人口は約7,000人。各地に分布するチョユ〈却域〉語は差異がかなり大きいけれども，基本的に相互に話を通じる。このことばを話す人びとはほぼみなチベット語カム方言に通じ，漢語が話せる者も多い。

チョユ語を話す人びとで，新龍縣に居住する者は自称を tcho<sup>55</sup> y<sup>55</sup> wa といい，雅江縣の普巴戎郷に居住する者の自称は phu<sup>55</sup> pa<sup>55</sup> zuŋ, 雅江縣の團結郷に居住する者の自称は ve<sup>35</sup> tsi<sup>55</sup> pi<sup>55</sup> である<sup>14)</sup>。

---

【\* ジャバ語】〈\* 扎巴語〉 \*Zha'ba<sup>1</sup> [Zhaba, Zaba] (チョユ〈却域〉語の1方言)

---

【解説】ここにいうジャバ語〈扎巴語〉はのちに誤認が明らかになったチョユ〈却域〉語の1方言についての記述である。ただしその記述報告に示されている使用人口は，チョユ語の話し手の数に一致するわけではない。おそらく黄布凡教授の調査になる〈扎壩語〉+〈却域語〉に一致するものと考えられる。孫(1983)および《ZMYYC》(所収の語彙は陸紹尊の提供)では，いずれも陸紹尊(1985)を踏襲して〈扎巴語〉という漢字の名称で記述されている。ここでは分布地と自称，他称について記載のある《ZMYYC》の〈扎巴語語音系統〉から訳出した。《甘孜州民族誌》の記述も基本的に孫，陸の情報を踏襲したうえで，かなり詳しい地名を記載しているが，分布地の情報はおそらく自称ではなくチベット人からの他称にもとづいて挙げたもので，実際にはチョユ語の話し手の分布域を示しているものと考えられる。

● 記述報告

陸紹尊〈扎巴語概況〉《民族語文》1985年第2期

孫宏開〈扎巴語〉〈六江流域的民族語言及其系属分類〉所収

● 使用人口

〈扎巴語概況〉：約2万人余，〈六江流域／扎巴語〉：約15,000人，《ZMYYC》：記載なし，  
《甘孜州民族誌》：約15,000人

〈扎巴語〉：《甘孜州民族誌》

略称は「ジャ〈扎〉語」で，この言語を話すチベット族は自称を「ジャ〈扎〉」もしくは「ジャバ〈扎巴〉」という。彼らは道孚，雅江，康定，九龍の4縣内に分布する。このうち雅江縣内では木絨郷，東昇郷，普巴絨郷および雅礮江より東の團結郷などの地である。道孚縣内では亞卓郷，紅頂郷，扎拖郷，仲尼郷，嚇拖郷(すなわち歴史上の上

渣壩, 中渣壩などの土百戸の所轄地区), 康定縣内の吉居郷, 九龍縣内の上團郷である。各地のジャバ〈扎巴〉語は発音の差異が比較的大きく, その下位方言区分〈土語區〉についてはさらに調査研究を待たなくてはならない。この言語を話すチベット族は約15,000人である。

〈扎巴語〉:《ZMYYC》

\* ジャバ語〈\*扎巴語〉は主に四川省ガンゼチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉の雅江, 道孚, 理塘, 新龍などの縣に分布しており, 使用人口は1.5万人である。彼らの自称は pa<sup>35</sup> tsɿ<sup>55</sup>〈博子〉, 周辺のチベット族は彼らのことを 'dra pa (扎巴) と呼んでおり, 最近の初歩的な調査の結果, 彼らの言語はチベット語とも, ムニャ〈木雅〉語, アルゴン〈爾龔〉語あるいはギャロン〈嘉絨〉語とも異なるこの地域に分布する一種の独立した言語である。ここでは雅江縣の團結郷の〈扎巴語〉の音声資料に基づき, その音韻体系を簡潔に紹介する:【以下略。】

---

【グイチョン語】 〈貴瓊語〉 Gui<sup>4</sup>qiong<sup>2</sup> [Guiqiong, Guichong]

地図 E

---

● 記述報告

孫宏開〈貴瓊語〉〈六江流域的民族語言及其系属分類〉所収

● 使用人口

〈六江流域〉: 約7,000人, 《ZMYYC》: 約7,000人, 《漢藏語概論》〈羌語支〉: 3,000人未滿, 《TBL》: 約7,000人, 《甘孜州民族誌》: 約7,000人

〈魚通語〉 ユトン語:《甘孜州民族誌》

このことばを話すチベット族は「ゲチアン〈葛羌〉」と自称し, チベット語ではこれを「オトンゲ mgo thang skad〈惡通格〉」, 学術的には「グイチョン〈貴瓊〉語」という名称を採用している。この言語を話すチベット族は主に康定縣の魚通區の時濟, 舍聯, 前溪, 麥崩などの郷と金湯區の三合郷(邊壩, 拉脚, 二射などの村, もと魚通土司の支配地)に分布しており, 人口は約7,000人, 瀘定縣瀘橋區の烹壩, 瀘橋, 長征などの郷も歴史的にはこの言語の話されていた地域(もと咱里土司の支配地)であったが, 現在はいずれも漢語を話している。

〈貴瓊語〉:〈六江流域〉

魚通地区に分布する少数民族の住民は, 自称を gui<sup>33</sup> tchɔ<sup>53</sup>といい, 〈貴瓊〉は彼らの



自称の音訳である。彼らは自分たちの言語を有し、周辺の漢語、チベット語と異なるのみならず、チアン〈羌〉語との差異も大きい。それゆえ、チアン語の方言とすることもできない。

グイチョン語を話す住民は約7千人、その大部分は爐定縣より大渡河を遡った兩岸の大地のうえに居住しており、爐定縣、天全縣の西北部にもわずかながら分布している。  
[…中略…]

グイチョン語を話す住民は主に漢族と雜居しているが、いくつかの村落に別れつつもまとまって居住している。彼らは家庭と村の中では自分たちの言語を使い、外に出たときには漢語を使う。各公社のグイチョン語はわりと一致しており、発音にわずかな違いが見られるものの、互いに十分理解し合える。

グイチョン語はシナ・チベット語族〈漢藏語系〉のチベット・ビルマ語派〈藏緬語族〉に属し、同語派〈語族〉の言語のなかで、基本語彙と文法体系はチアン語支〈羌語支〉の言語に近いのでチアン語支〈羌語支〉に属すべきものとするのが妥当だと考えられる。

---

【シヒン語】 〈史興語〉 Shi<sup>3</sup>xing<sup>4</sup> [Shixing, \*Shihing]

地図 L

---

●記述報告

黃布凡、仁增旺姆〈史興語〉《藏緬語十五種》所収

孫宏開〈史興語〉〈六江流域的民族語言及其系屬分類〉所収

●使用人口

〈六江流域〉：約2,000人前後、《ZMYYC》：約2,000人前後、《藏緬語十五種》：約1,800人前後、《漢藏語概論》〈羌語支〉：約2,000人前後、《TBC》：約1,800人、《甘孜州民族誌》：記載なし

〈史興語〉：《藏緬語十五種》

シヒン〈史興〉語は四川省涼山彝族自治州木里藏族自治縣瓦廠區水洛郷の一部の村里のチベット族が話す一種の言語である。水洛郷は木里縣城の西北部にあり、西はコンガ雪山を臨み、水洛河の兩岸に位置する。水洛とはチベット語の *co lu* (意味は「乳をそそぐ」) の音が変じたものという。これらの郷ではシヒン〈史興〉語を話すチベット族以外に、チベット語のカム方言 (現地では *ka<sup>33</sup> mi<sup>55</sup>* 〈嘎米〉のことばと呼ぶ) とプミ〈普米〉語を話すチベット族、および漢、モンゴル〈蒙〉、ナシ〈納西〉などの民族の住民がいる。

シヒン語を話す住民はわずか1,800人前後にすぎない。自称は  $su^{55} hi^{55}$  または  $s^{55} hi^{55}$  ( $hi^{55}$  は「人」の意,  $su^{55}$  は河の名前である。シヒン〈史興〉語では水洛河を  $su^{55} dz_{33}$  といい,  $dz_{33}$  とは「水」の意味である。) という。現地のモンゴル〈蒙古〉族もまた彼らのことを  $su^{55} hi^{55}$  と呼ぶが, カム方言〈嘎米話〉を話すチベット族は彼らのことを  $se^{55} ni^{53}$  と呼んでいる。プミ語を話すチベット族とナシ族は彼らを  $au^{33} mu^{55}$  と呼ぶ。そのため中華人民共和国成立後, 自らの族称を「シユム〈休木〉族」として届け出たこともあったが, 近年になってようやく族称は正式にチベット族と定められた。

歴史上この地一帯と村落集合体についてシュロ〈鼠落〉(《明季松潘編圖》)とシユミ〈虚米〉(《鹽源縣誌》)などの名称があった。伝承によれば彼らの祖先は遠い昔に山西から雲南の大理を経由してこの地に移り住んで来たのだという。

【…中略…】

シヒン〈史興〉語は家庭と村の内部でのみ使われ, 外出してのコミュニケーション時には漢語とプミ語, あるいはチベット語カム方言が使われる。それゆえあまり村の外に出ない女性や老人は一般的に単一言語使用者で, しばしば村の外に出かける男性と学生は一般に2言語もしくは多言語并用ができる。

〈史興語〉: 〈六江流域〉

シヒン〈史興〉語は主に四川省涼山彝族自治州木里藏族自治縣一區の水洛河およびその下流の衝天河兩岸の台地の上に分布し, 使用人口は約2千人前後である。彼らは自称を  $s^{55} hi^{55}$  〈史興〉とい, 彼らと雑居する者にプミ〈普米〉族, ナシ〈納西〉族, イ〈彝〉族などの民族がいる。過去の地方誌や著作のなかには木里地区に一種の〈虚米〉なるところがあると記述したものがある。【…中略…】木里縣でプミ語を話す者は, 自称を  $phzə^{55} mi^{55}$  〈普米〉といい, 【彼らは】チベット語(カム方言)を話す住民のことを  $ka^{35} mi^{55}$  〈呷米〉と呼び, アルス〈爾蘇〉語西部方言【訳注:孫宏開教授のいうリス〈栗蘇〉語, 黄布凡教授のいうルズ〈呂蘇〉語】を話す住民のことを  $bu^{35} la^{55} mi^{55}$  〈布蘭米〉と呼び, シヒン語を話す住民のことを  $au^{35} mi^{55}$  と呼んでいる。それゆえ, 上述の〈虚米〉という名称の来源はプミ〈普米〉語を話す住民のシヒン〈史興〉語を話す住民に対する呼称にする。

シヒン語を話す住民の自己認識では, 「彼ら【訳注:「われら」の誤り】の話す言葉は訛ってる, チベット語とナシ語が混ざった結果だ」というが, 事實はさにあらず, 初歩的な分析の結果, シヒン〈史興〉語は〈藏緬語族/羌語支〉に属する独立した一言語であって, チベット語, プミ語, イ語, ナシ語の影響を受けて, 近隣の言語から借用語を吸収したにすぎない。

シヒン語の使用範囲はかなり狭く, 家庭と集まって住む村落のなかでのみ使用され,

外ではプミ語か漢語が使われる。シヒン語の内部はかなり一致しており、方言差はない。

---

【ナムイ語】〈納木義語〉 Na<sup>4</sup>mu<sup>4</sup>yi<sup>4</sup> 〈納木茲語〉 Na<sup>4</sup>mu<sup>4</sup>zi<sup>1</sup> [Namuyi]

地図 K

---

●記述報告

黄布凡 仁增旺姆 〈納木茲語〉《藏緬語十五種》所収

孫宏開 〈納木義語〉《六江流域的民族語言及其系屬分類》所収

劉光坤 〈納木依語概要〉《雅砻江上游考察報告》1985年？【未見。】

●各 論

拉瑪茲 [人屋] 〈納木依語支屬研究〉《民族語文》1994年第1期

池田 巧 「西曆1900年に記録されたナムイ語の語彙——H. R. Davies 著 Yün-Nan 所載の西南中國の民族語彙研究1」『東方學報』第72冊 2000年

和即仁 〈“摩些”與“納木依”語源考〉《民族語文》1991年第5期

●使用人口

〈六江流域〉：約5,000人, 《ZMYYC》：約5,000人, 《藏緬語十五種》：記載なし, 《漢藏語概論》〈羌語支〉：約5,000人, 《TBC》：記載なし, 《甘孜州民族誌》：約5,000人

〈納木義語〉：《甘孜州民族誌》

主に涼山州の冕寧縣, 木里藏族自治縣, 西昌縣, 鹽源縣, およびガンツェ 〈甘孜〉州の九龍縣内の一部の地区に分布する。この言語を使用するチベット族は約5,000人いる。各地でこの言葉を話すチベット族は基本的に2種類のよく似た自称があり, 九龍と木里縣内に居住する者の自称はナムズ 〈納木茲〉であり, 冕寧, 西昌, 鹽源などの地域内に居住している者の自称はナムイ 〈納木義〉である。中華人民共和國成立以前はナムイ語を話すチベット族はいずれも 〈小西蕃〉と呼ばれ, その言語に方言の違いは認められていなかった。九龍縣でナムイ語を話すチベット族は, 主に子耳郷の麻窩村と萬年村に分布している。

〈納木茲語〉：《藏緬語十五種》

ナムイ 〈納木義〉語を話す人々は自称を na<sup>55</sup> mu<sup>33</sup> z<sup>31</sup> といい, 四川省ガンツェチベット族自治州 〈甘孜藏族自治州〉九龍縣 (孜爾公社), 涼山彝族自治州の冕寧縣 (新興公社), 西昌付近の大橋公社および木里藏族自治縣の保波公社などの地域に分布している。木里縣では, プミ 〈普米〉語を話すチベット族はナムズ 〈納木茲〉のことを

ər<sup>33</sup> su<sup>55</sup> (アルス〈爾蘇〉) と呼び、土地のモンゴル〈蒙古〉族は mu<sup>33</sup> hi<sup>55</sup> (「雑種」の意) と呼ぶのに対してアルス〈爾蘇〉はモンゴル族のことを ga<sup>33</sup> hi<sup>55</sup> (「純種」の意) と呼んでいる。木里縣に居住する各民族はまたナムズのことを næ<sup>33</sup> mi<sup>55</sup> または na<sup>33</sup> hi<sup>55</sup> の一部分であるとも見なしている。næ<sup>33</sup> mi<sup>55</sup> または na<sup>33</sup> hi<sup>55</sup> というのは、土地の人がナシ〈納西〉族、土地のモンゴル〈蒙古〉族、アルス〈爾蘇〉に対する一種の通称で、彼らはみな〈西教〉を信仰しているものたちだと考えられている。1949年以前は漢人はアルスを〈大西蕃〉とよび、ルズ〈呂蘇〉を〈小西蕃〉と呼んでいた。ナムズ人はかつて自らを〈西蕃族〉として届け出たことがあったが、1984年に正式にチベット族という族称に決定した。

ナムズ語はチベット・ビルマ語派〈藏緬語族〉に属するが、語群〈支属〉はまだ確定できず、更なる比較研究が必要である。

---

【アルス語】〈爾蘇語〉 Er<sup>3</sup>su<sup>1</sup> 〈呂蘇語〉 Li<sup>3</sup>su<sup>1</sup> [Ersu, Tosu, Lusu, \*Luzu] 地図 I

---

●記述報告

- 黄布凡, 仁增旺姆〈呂蘇語〉《藏緬語十五種》所収
- 孫宏開〈爾蘇語〉〈六江流域的民族語言及其系属分類〉所収
- 孫宏開〈爾蘇語(多續話)簡介〉《語言研究》總第3期 1982年
- 劉輝強〈爾蘇語概況〉《民族研究論文選》第1輯 1983年【未見】

●歴史研究

- 西田龍雄『多續譯語研究』(松香堂:1973年)

●使用人口

〈六江流域〉爾蘇語:約2万人,《ZMYYC》爾蘇語:約2万人,《藏緬語十五種》呂蘇語:記載なし,《漢藏語概論》〈羌語支〉爾蘇語:約2万人,東部方言約13,000人,中部方言約3,000人,西部方言約4,000人,《TBC》呂蘇語:記載なし,《甘孜州民族誌》:約20,000人

〈爾蘇語〉:《甘孜州民族誌》

トス〈多續〉語ともいい、この言語を話すチベット族は雅安地区の石棉、漢源、涼山彝族自治州の甘洛、越西、冕寧、木里藏族自治縣、および甘孜藏族自治州九龍縣の一部の地区に分布し、人口は約20,000人である。この言語は内部の違いが比較的大きく、東部、中部、西部の三つの方言区に分けられる。ガンツェ〈甘孜〉州の九龍縣内のチベット族が話すアルス〈爾蘇〉語は西部方言に属する。西部方言はさらに二つの下位方言

〈土語〉群に分けられる。呷爾土語群区は、九龍縣呷爾鄉の呷爾村、華丘村、斜卡鄉の雪窪村と洛讓村、乃渠鄉の爛礪村、七日村、水打壩村、下圍鄉の下堡子村に分布する。この言葉を話すチベット族の自称はプ〈普〉、ルリ〈魯日〉あるいはプルリ〈普魯日〉【訳注：自称の発音の詳細は不明】である。里汝土語群区は、九龍縣烏拉溪鄉の河壩村、偏橋村、煙袋鄉の淇木林村、踏卡鄉の羊房子村、喇嘛寺村、甲堡子村、庄子房村、朶洛鄉の朶洛村、麼兒山村に分布する。この言葉を話すチベット族は自称をルズ〈里汝〉という。

〈爾蘇語〉：〈六江流域〉

アルス〈爾蘇〉人は大渡河の下流雅安地区の石棉、漢源、涼山彝族自治州の甘洛、越西、冕寧、木里、および甘孜藏族自治州の九龍などの縣に分布し、人口は約2万人である。アルス人は自称を  $aɿ^{55} su^{55}$  といい、 $aɿ^{55}$  は「白」の意味で、 $su^{55}$  は「人」の意味である。したがって、アルス人の自称は、実は「白い人」の意であり、これはプミ〈普米〉族の自称  $phz̥^{55} mi^{55}$  と同じ意味となる。

アルス〈爾蘇〉語は三つの方言区に分けられるが、方言間の差異は大きく、東部方言（すなわちアルス〈爾蘇〉方言）を話す者は甘洛、越西、漢源、石棉一帯に分布し、約1万3千人いる。中部方言（すなわちトス〈多續〉方言）は冕寧の東部地区に分布し、約3千人いる。西部方言（すなわちリス〈栗蘇〉方言）【訳注：後述のルズ〈呂蘇〉に同じ】を話す者は木里、九龍縣などに分布し、約4千人いる。

アルス語はシナ・チベット語族〈漢藏語系〉のチベット・ビルマ語派〈藏緬語族〉に属し、彝語とチベット語にかなりの影響を受けてはいるものの、同語派〈語族〉の諸語群〈語支〉のなかで、基本語彙と文法体系はチアン語支〈羌語支〉の言語にもっとも近く、チアン語支〈羌語支〉に属すべきものと考えられる。

〈呂蘇語〉：《藏緬語十五種》

ルズ〈呂蘇〉語は自称を  $lu^{55} su^{53}$  という人々の話す一言語である。四川省ガンツェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉九龍縣（彎壩郷）と涼山彝族自治州の冕寧、普雄（呷洛郷）、越西（保安郷）、甘洛、木里（二區卡拉郷、保波郷）などの縣に分布している。1949年以前は、現地ではかれらのことを〈小西蕃〉あるいは〈西教〉と呼んでいたが、49年以降もなかには〈蕃族〉と呼ばれたものもあり、木里縣に居住するものは、プミ〈普米〉語を話すチベット族からブラン〈普郎〉族  $bu^{33} lan^{53}$  と呼ばれており、「ブラン」とはおそらくルズ語で冕寧をさす呼称の  $bo^{31} lo^{53}$  の訛りではないかと考えられる。というのも、木里縣でルズ語を話す住民の一部は三代前に冕寧から移住してきたものだからである。ルズ人はここ数年次々と族称をチベット族に改めている。

孫宏開の調査報告では、ルズ語をアルス〈爾蘇〉語の一方言とし、アルス語をナムイ〈納木義〉語とは異なる一言語と見なしている。我々は木里縣でルズ語やナムズ〈納木茲〉(ナムイ〈納木義〉と同じ)語を話す人々から理解したところでは、アルス、ルズ、ナムズといった呼称の相互関係は非常に錯綜していて複雑であり、ルズ語を話す人とプミ〈普米〉語を話すチベット族はナムズ語を話す人のことを  $aɿ^{33} su^{53}$  と呼び、ナムズ人はルズ人のことを  $\eta u^{55} hɿ^{55}$  と呼んでいる。ナムズ人はまたナシ〈納西〉族および土地のモンゴル〈蒙古〉人とも関係があつて、土地の人々はナシ族、土地のモンゴル族、アルス人と  $o^{55} po^{55}$  人をまとめて  $na^{33} hɿ^{55}$  と呼んでおり、ナムズ語の  $n\tilde{a}^{33} mi^{55}$  (「黒いひと」の意) に相当する。ナムズ人もまた自分たちが  $n\tilde{a}^{33} mi^{55}$  の一部分だと考えており、雲南では寧蒗、永勝一帯のナシ族が自称を  $na^{33} hɿ^{33}$  とする。アルスはまた土地のモンゴル族のことを  $g\tilde{a}^{33} hɿ^{55}$  (「純種」の意) と呼び、土地のモンゴル族はアルスのことを  $mu^{33} hɿ^{55}$  (「雑種」の意) と呼んでいる。このような呼び方から考えると、ルズ人とナムイ人は民族の来源は相当に異なっている(陳宗祥教授のいう白黒二系にそれぞれ別れる)。言語からみても、ルズ人とナムイ人はともに違いが相当に大きいと感じており、お互いに話をして理解し合える程度はかなり低い。これらの言語については全面的な比較研究を要するとともに、これらの自称と他称の関係および歴史的状況をさらに詳しく研究する必要があるので、現在のところ、ルズ語の支属はまだ確定することはできない。

## 10 消滅の危機について

【解説】中国では少数民族が自らの民族語による教育を受ける権利を保証しているが、それは政策レベルで公式に認められた民族の言語を意味している。〈川西民族走廊〉の諸言語を話す人びとの大部分は「チベット族」なので、民族の言語としてチベット語は政策的にも重視され、現地の学校でも漢語とチベット語の2言語による教育が行なわれているが、その下位レベルで使用されている「土地のことば」〈地脚話〉には何らの政策的配慮はない。近年の急速な経済発展の影響は大きく、よりよい教育をうけ、経済的なチャンスを掴むには民族語よりも漢語の習得が不可欠であるという状況が広まるとともに、母語である「土地のことば」は政治的経済的に有用性の低い言語として相対的に弱い立場にならざるを得ないという現実がある。〈川西民族走廊〉地域での漢語と民族語における漢語の優位性の拡大、民族語と土地のことばにおける民族語の優位性について、具体的状況のわかるを報告それぞれ訳出しておいた。

● 漢語とチベット語の二言語併用

瞿霽堂〈藏語〉《中國少数民族語言使用情況》(中國藏學出版社:1994年) p. 404

各民族間でのコミュニケーションには主に漢語が使われる。異なる言語を話すチベット族どうしのコミュニケーションにも漢語が使われる。チベット族の二言語併用状況は地区によって異なり、たとえば康定縣では、特に町中に住むチベット人は大部分がすでに漢語を使用するようになっており、年輩の者どうしの間でのみチベット語が使われ、青少年の大部分はすでにチベット語がわからない。郊外の農村の状況は少々異なり、たとえば爐城区〔康定の市街区の意〕の榆林郷老榆林村44戸233人中116人は漢語ができ、18人は漢語がなんとか理解できるので、村の総人口の58%を占める。それに対してデルゲ(徳格)縣では、学校内および役人どうしの間では漢語が使用されることが多いのを除けば、ふつうは主にチベット語が使われる。一般的に言って、役人、学生、労働者などの大多数は漢語がわかる。それゆえ、会議、教育、公務上での連絡などには漢語、もしくは漢語とチベット語の二言語併用が多いが、農村、牧地区、あるいは家庭では主にチベット語が使用されている。

● 〈地脚話〉の使用範囲の縮小傾向

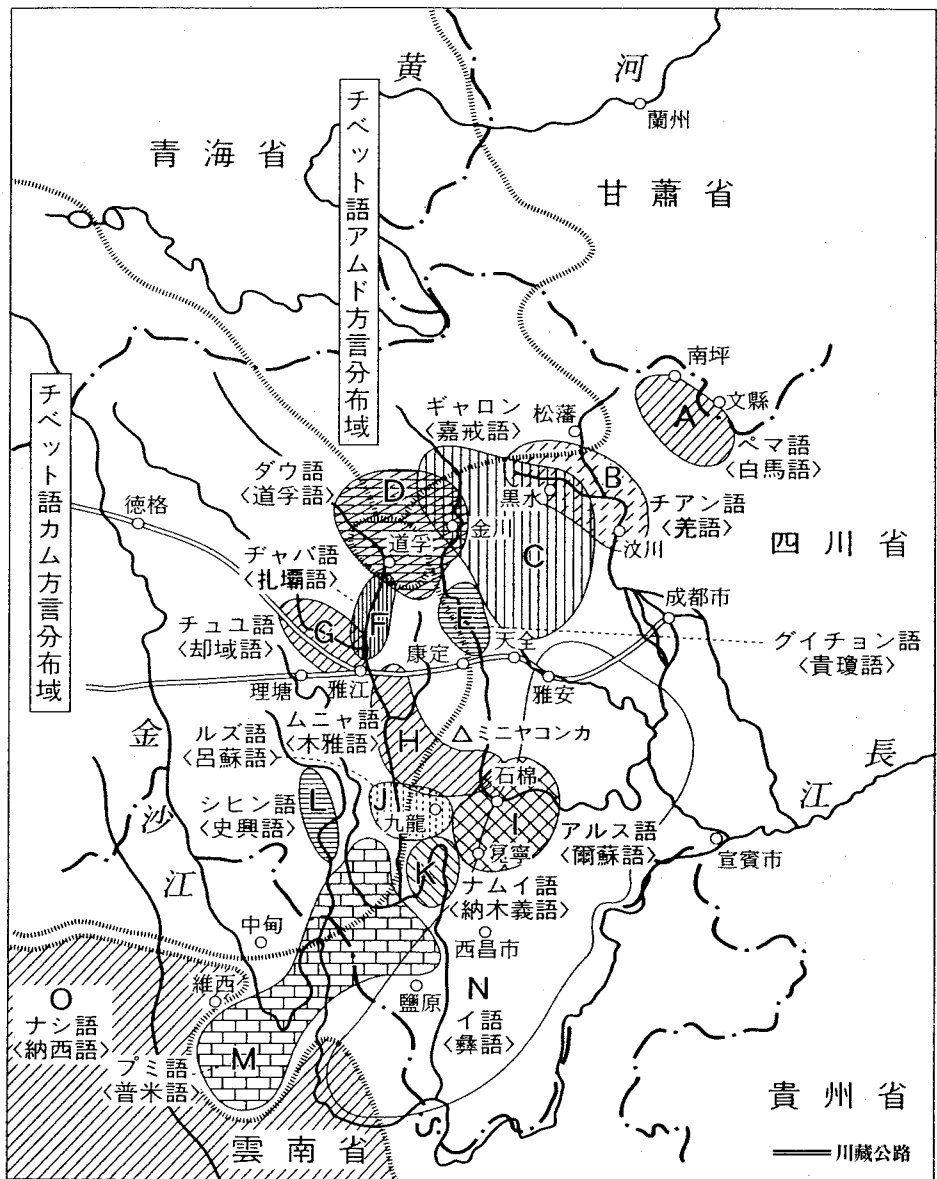
黃布凡〈川西藏區の語言關係〉《中國藏學》1988年第3期 p. 145

「使用範囲」には二つの意味が含まれており、一つは通用している地域であり、いま一つは使用する場所である。チベット語と漢語の強力な影響下で、〈地脚話〉は上述のどちらの意味においても次第にその範囲を縮小している。

大部分の〈地脚話〉は家庭と村落の内部でのみ使用され、村を出るとチベット語あるいは漢語に切り換えて使用する。使用地区の縮小についてムニャ(木雅)語を例に挙げると、ムニャ・チベット族(木雅藏族)のゴンボ(貢布)氏(現在64歳)によると、歴史上ムニャ(木雅)語の分布地域は現在よりもはるかに大きく、遠い昔のことはさておき、彼のおじいさんの代に限ってみても、大渡河流域の爐定縣の花生坡と石棉縣の草枯一帯ではまだムニャ(木雅)語が話されていたが、今日では爐定縣では話せる者はいなくなりました。石棉縣の草枯區草枯郷ではわずかに数十人、6、70歳以上の老人が話せるのを残すのみである。筆者【黃布凡】がかつて康定縣營官寨(四川・チベットルート(川藏公路)上にある)で実習した頃には、その地域の住民はまだムニャ(木雅)語を話していたが、現在ではみなチベット語を話すようになってしまった。いまひとつグイチョン(貴瓊)語について述べると、数十年前まで康定縣魚通區時濟郷ではこの言語がまだ話されていたが、現在は漢語に切り換わり、高い山の上の小さな1集落(tocomo村という)のわずか数名の6、70歳以上の老人が話せるのを残すのみで、話

せるとはいえ基本的な単語を覚えているにすぎず、まとまった内容の会話を行なうのはすでに困難になっている。彼らは村落でも家庭内でもすでに漢語を使うようになってしまったのだ。国道〈公路〉の沿線地帯では、このようにわずか3, 4世代で、100年にも満たない時間のうちに言語変換過程を完了させてしまうような事例が数多く見られる。現代の日増しに発達する交通と各民族地区間の経済、文化の交流が日々促進されつつあるなかで、言語島の縮小の趨勢はいっそう加速度的に進行していくにちがいない。





地図 〈川西民族走廊〉 諸語分布概略図

池田巧「山之路」月刊『言語』29巻6号、59-64頁、大修館書店、2000年6月より転載。

## 謝 辞

本稿は1999年9月25日(土)国立民族学博物館にて開催された「消滅の危機に瀕した人類言語の予備的調査研究」第2回研究会「東アジアの現状と問題点」にて配付した資料に改訂を加えたものである。当日の報告には、出席者よりさまざまなコメントと追加情報をいただいたほか、本資料集の編集過程では、James, A. Matisoff 教授にカリフォルニア大学および STEDT における資料の閲覧等の便宜を計っていただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

## 注

- 1) 費孝通〈關於我國民族的識別問題〉《中國社會科學》1980年第1期。
- 2) 李紹明〈唐代西山諸羌考略〉《四川大學學報》1980年第1期。
- 3) 黄布凡〈道孚語語音和動詞形態變化〉《民族語文》1990年第5期を参照。
- 4) 孫天心先生によれば、蒲西郷の蒲西村と小伊里村では2種類の言語が使われており、杜柯河を境として河の北側と大伊里村では霍爾巴・上寨語の上寨方言を話し、河の南側と斯羅武村では〈観音橋話〉を話している。【訳注：〈霍爾巴・上寨語〉はダウ〈道孚〉語ゲシツァ〈格什扎〉方言に同じ。】
- 5) この名称は本書で別に紹介しているムニャ〈木雅〉語の使用者の自称と同じであるが、言語は異なる。
- 6) 王士宗「ダウ語におけるチベット語からの借用語の子音結合」(Stephen, S. Wang. Consonantal clusters of Tibetan loanwords in Stau. *Monumenta Serica*, vol. XXIX. 1970-1971., pp.631-658.)
- 7) ホジソン「西蕃語とホル語の語彙」(Hodgson, H.H. Sifan and Horsok vocabularies. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 22. pp.121-151.) ホジソンの記録したホル語というのは本稿で言うダウ〈道孚〉方言に属する爐霍のことば〈爐霍話〉である。爐霍はチベット語でいうところの Hor khag sde lnga「ホル五部」(現在のガンツェチベット族自治州〈甘孜藏族自治州〉)の道孚、爐霍、甘孜、朱倭、東谷などの地の区域内にあるので、ホジソンはそれにより命名したのである。しかしチベット語の Hor には上述の意味のほか、「モンゴル人」「チベット北部の遊牧民」「青海の土族」「ウイグル」などの意味もあるため、「ホル」という名称でこの言語を呼ぶと容易に誤解をひき起こす恐れがある。
- 8) 孫宏開氏が〈六江流域的民族的民族語言及其系属分類〉(《民族學報》第3期 雲南民族出版社 1983年)で紹介したアルゴンというのは、本稿でいうゲシツァ〈革什扎〉方言の丹巴のことば〈丹巴話〉である。氏がこの言語をアルゴン語と呼ぶのは、馬長壽《嘉戎族社会史》がこの言語を話す人びとは自称を rgu という述べていることに基づいている。我々が知り得たところでは、各地(革什扎地区を含む)のダウ語を話す住民はいずれも自称を rgu といわないどころか、rgu という単語は「畜生」という意味であって、差別的偏見が含まれている。
- 9) 注6)、7)を参照。
- 10) 瞿霽堂〈嘉戎語的方言〉(1989年11月第5回中国言語学会論文【訳注：のち瞿霽堂〈嘉戎語的方言—方言劃分和語言識別〉として《民族語文》1990年第4期、第5期に発表。】)
- 11) 多爾吉〈川西藏區格什扎話〉(《西南民族学院學報》1988年“民族語言文學研究專輯”)

- 12) 普巴戎の人は時にこの言語のことを  $ruŋ^{13}k\epsilon^{55}$  (農區のことば) とよび、團結郷の人は  $\eta^{13}k\epsilon^{55}$  (自分のことば),  $ruŋ^{13}r\dot{r}i^{55}$  (自分のことば)  $paŋ^{13}\dot{r}i^{55}$  (?) と呼んでいるが、いずれも固有名とは考えがたい。
- 13) 理塘のチヨユ語は未調査なので、状況は不明。
- 14) 陸紹尊のいう〈扎巴語〉(《民族語文》1985年第2期所載)は自称を  $ve^{35}ts\gamma^{55}pi^{55}$  とする住民の話すチヨユ語の一方言である。

## 文 献 【補】

【解説】本資料集のレファランズに取り上げていないもので、〈川西民族走廊〉地域の諸言語の研究に参考価値の高い文献を中心に補っておく。もとより網羅的な目録ではないので、チベット・ビルマ諸語の研究文献として重要なものであっても、〈川西民族走廊〉地域に直接関わらない文献は取り上げていない。いっぽうでここに掲げた文献相互の関わりや研究史をたどる上で特に重要と思われるものについては、重複を厭わず再掲載したことがある。便宜上ここでは ●民族と言語 ●研究史と系譜分類 ●類型論的分析の3分野に分けておいた。

### ●民族と言語

- 費孝通〈關於我國民族的識別問題〉《中國社會科學》1980年第1期
- 格勒《甘孜藏族自治州史話》(四川民族出版社:1984年)
- 格勒《論藏族文化的起源形成與周圍民族的關係》(中山大學出版社:1988年)
- 黄布凡〈從藏緬語同源詞看藏緬語族群的史前文化〉《民族語文》1998年第5期
- 李範文《西夏研究論集》(寧夏人民出版社:1983年)
- 李紹明〈唐代西山諸羌考略〉《四川大學學報》1980年第1期
- 瞿霽堂《藏族的語言和文字》(中國藏學出版社:1996年)
- 四川省人口普查辦公室編《四川藏族人口》(中國統計出版社:1994年)【未見】
- 四川省民族研究所《四川少數民族》(四川民族出版社:1982年)【未見】
- 孫宏開〈試論邛籠文化與羌語支〉《民族研究》1986年第2期
- Sun, Hongkai. A preliminary investigation into the relationship between Qiong Long and the languages of the Qiang branch of Tibeto-Burman. Translated by Randy J. LaPolla. *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. 12.1 1989.
- 孫宏開〈語言識別與民族〉《民族語文》1988年第2期
- Sun, Hongkai. On nationality and recognition of Tibeto-Burman languages. Translated by Randy J. LaPolla. *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. 15.2. 1992.
- 孫宏開〈論羌語雙語制——兼談漢語對羌語的影響〉《民族語文》1988年第4期
- 孫宏開〈關於瀕危語言問題〉《語言教學與研究》2001年第1期
- 謝建猷〈木里多語社區〉《民族語文研究新探》(四川民族出版社:1992年)

## ●研究史と系譜分類

- 戴慶厦 主編《二十世紀的中國少數民族語言研究》(書海出版社:1998年)
- 黃布凡〈川西藏區的語言關係〉《中國藏學》1988年第3期
- 黃布凡〈同源詞比較詞表的選詞範圍和標準——以藏緬語同源詞族比較詞表的制訂為例〉《民族語文》1997年第4期
- 劉光坤〈藏緬語族中的羌語支試析〉《西南民族學院學報》1989年第3期
- 李永燧〈羌緬語群爭議〉《民族語文》1998年第1期
- 孫宏開〈羌語支屬問題初探〉《民族語文研究文集》(青海民族出版社:1982年)
- 孫宏開〈試論中國境內藏緬語的譜系分類〉Paul K. Eguchi et al., (eds.) *Languages and History in East Asia. Festschrift for Tatsuo Nishida on the occasion of his 60th birthday.* Kyoto: Shokado. 1988.
- 孫宏開〈從詞彙比較看西夏語與藏緬語族羌語支的關係〉《民族語文》1991年第2期
- 孫宏開〈論藏緬語族中的羌語支語言〉《語言暨語言學》第2卷第1期(台灣中央研究院語言學研究所:2001年)

## ●類型論的分析

- 黃布凡〈羌語支〉馬學良主編《漢藏語概論》上(北京大學出版社:1991年)
- 〈第一節 概述 第二節 語音 第三節 語法 第四節 詞彙 第五節 結語〉
- 黃布凡〈藏緬語聲母對韻母演變的影響〉《藏緬語新論》(中央民族學院出版社:1994年),もと《中國語言學報》1991年第4期
- 黃布凡〈藏緬語動詞的趨向範疇〉《藏緬語新論》所收
- 黃布凡〈藏緬語的情態範疇〉《藏緬語新論》所收,もと《民族語文》1991年第2期
- 黃布凡〈藏緬語“指代→名”偏正結構語序〉《藏緬語新論》所收
- 黃布凡〈藏緬語的“馬”和古漢語的“駝”〉《藏緬語新論》所收,もと《中央民族學院學報》1989年第2期
- Lien, Chinfa [連金發] The development of PTB prefixes and consonant clusters in Ersu, Qiang, Pumi and Jiarong languages. *Tsing Hua Journal of Chinese Studies, New Series* 21.2. 1991.
- 西 義郎〈中國境內藏緬語支與方向的動詞付加成分〉《民族語文研究情報資料集》第13集:1990年,もと日本語『チベット・ビルマ諸語の言語類型学的研究』昭和59年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書(京都大学文学部:1985年)所收
- 孫宏開〈我國藏緬語動詞的人稱範疇〉《民族語文》1983年第2期
- 孫宏開〈藏緬語若干音變探源〉《中國語言學報》總第1期(商務印書館:1983年)
- 孫宏開〈藏緬語動詞的互動範疇〉《民族語文》1984年第4期
- 孫宏開〈藏緬語複補音的結構及其演變方式〉《中國語文》1985年第4期
- 孫宏開〈原始藏緬語構擬中的一些問題——以“馬”為例〉《民族語文》1989年第6期
- 孫宏開〈藏緬語量詞用法比較——兼論量詞發展的階段層次〉《中國語言學報》總第3期(商務印書館:1989年)
- 孫宏開〈第一部分 導論〉《藏緬語語音和詞彙》(中國社會科學出版社:1991年)
- 〈一, 關於同源詞問題〉
- 〈二, 關於單輔音聲母問題〉
- 〈三, 關於複輔音聲母問題〉
- 〈四, 關於複元音問題〉
- 〈五, 關於長短元音和鬆緊元音問題〉

- 〈六, 關於鼻化元音和卷舌元音問題〉
  - 〈七, 關於輔音韻尾問題〉
  - 〈八, 關於聲調問題〉
  - 〈九, 關於弱化音節問題〉
- 孫宏開 〈論藏緬語語法結構類型的歷史演變〉《民族語文》1992年第5期
- 孫宏開 〈論藏緬語語法結構類型的歷史演變(續)〉《民族語文》1992年第6期
- 孫宏開 〈試論藏緬語中的反身代詞〉《民族語文》1993年第6期
- 孫宏開 〈再論藏緬語中動詞的人稱範疇〉《民族語文》1994年第4期
- 孫宏開 〈藏緬語人稱代詞格範疇研究〉《民族語文》1995年第2期
- 孫宏開 〈論藏緬語疑問方式試析——兼論漢語, 藏緬語特指問句的構成和來源〉《民族語文》1995年第5期
- 孫宏開 〈論藏緬語的語法形式〉《民族語文》1996年第2期